

會



報

1965年12月

246

日本山岳会

創立六十周年を迎えて

日 高 信 六 郎

★ 60 ★
 日本山岳会は今年で六十年を迎えた。英国の百八年、奥の百三年、伊、スイスの百二年、仏の九十一年とはくらべものにならないが、米の六十三

年とカナダの五十九年との間にあって、マア相当のランクを占めていと云えよう。

わが国近代登山の黎明期に誕生したわが山岳会が、明治から大正の初期にかけて、会員による当時としては劃期的な登山の実践と、その頃では山に関する唯一の定期刊行物としての「山岳」、および会員特に小島さんの山岳文学や高頭さんの「日本山岳志」等の刊行によって、知られざる山谷を紹介し登山の風潮を世間に拡めた功は何人も認めるところであろう。

七人の創立発起人のうちたゞ一人、武田さんが今日なお健在で、山登りをつづけ、研究を怠らず、その間に後進を指導しておられる。その博覧強記と息の長さは他に例を見ないところで、敬服の他はない。高野さんが六十周年を前にして昨年未だなくなられたのは惜しいことであつた。氏が最後まで会のことを思い、会員に親しみを抱いておられたことは、会報への寄稿や、下さった手紙によっても窺わ

れ、頭がさがるのである。

わたくしが本会に入会したのは福岡一の中学二年のときであつた。町の本屋で見つけた「山岳」第二年第三号を読み、寄宿舎の図書室にあった「日本山岳志」に挿まれた山岳会設立趣意書を見たのが機縁で、入会を申込んだ。その頃は紹介者不要、会費年額金一円で年三回刊行の「山岳」(定価一冊三十五銭)が貰えた。年令の制限もないと見えて、田舎の十五歳の子供が山岳会に入れたもつた次第である。従つて祝賀会るとき松方会長が云われたように、年をゴマ化した訳ではなかった。

大正元年に上京して一高に入つたところ、山好きの先輩や仲間がすぐ出来た。その上に水泳部の先輩に本会創立発起人の梅沢さんがおられ、その手引きで山岳会のおえら方に近づくことが出来た。われわれがグルーブを作り、先ず一高山山岳会という名で発足したのは大正二年五月だったが、発会式には高野さんと、辻村伊助さんが幻燈講演もされ、小島、辻本、梅沢辻村太郎の諸氏を囲んで晩餐会を開き、お話しを伺った。旅行部という名で校友会の一部になったのは翌年三月である。

山岳会の先輩から多大の援助と指導を受けたが、特に高野さん、木暮さん、田部さん、辻村太郎さんには大変なお世話になって、その後	わかれの山岳会は還暦の年に達した。古いよき伝統をつづけると共に、常に新しい世代によって受けつがれ、新しい血によって若返る清新な山岳会でありたい。
もこれらの先輩と交わりを続け、同時に同年配の仲間がふえ、若い世代の人々とも親しくなることが出来たのも山岳会のお蔭であり、こんな機会に恵まれたことを一生の清福とよこんでいる。	われわれは又、日本の山岳界から眼をそらす訳には行かない。戦後われわれは登山界の復興につとめ、体協の一員として国体登山や海外登山の世話をつづけた。その後、全日本岳連と手をつないで日本山岳協会を組織したが、今や山岳協会は新しい構想の下に真に全国的なものに脱皮しようとして
る。各人はその好みと体質気質と思想傾向に従つて、いろいろな形で山に登り、山に挑み、山と登山を研究し、山を思索し、山を眺め山にとけ入る。しかしだれも自分の流儀を他人に押しつけず、山によって一脈通ずるものを感じて、わけ隔てるところがない。土曜日の集りには田部さんや冠さん	あるかについては、いろいろ意見があると思う。わたくしは山に登る者としては、ほかの仲間手賃して、正しい登山の進歩発展と悲しむべき遭難の防止のために力を致すべきだと信ずるものである。どんな形でそれが行われるか、それについてはさらに思索と研討を要するところであろうが。
中村さんなどの顔が見え、大小の集会では武田さんや近藤さんが横さんや藤島さんと談笑する。若い人やご婦人の仲間がふえて行くのもうれしい。	

目次

創立60周年を迎えて	日高信六郎	1
新名誉会員紹介	望月 達夫	2
南極越冬再開で	武藤 晃	2
五大高山の初登攀	松田 雄一	3
日本山岳協会の新組織について		4
60周年記念山行ー東京・秋田ー		5
日本のアルピニズム	安川 茂雄	6
アラスカの山	芳野 超夫	7
ロスコ山群	上 智 大 学	9
フランス登山界(2)	近藤 等	10
グリーンランド	宮原 巖	10
ゆさぶられる栗駒山	村上 金吾	11
図書紹介		12
リュックサック麻痺	長谷部昭久	12
会員通信		14
ペルー・アンデス	井田 英彦	15
支部情報ー越後・東京ー		15
会務報告(16)、新入会員(18)、会員係よりお願い(19)		
★その他お読み忘れなきようお願い★		
3頁・6頁・10頁・19頁		

新名誉会員

紹介

本会では一九五〇年四月十

九日の役員総会において三枝守博氏他六氏を名誉会員に推薦して以来十五年間の長きに亘り推薦の行われぬまゝ今日に到った偶々昨秋新名誉会員の推薦の話がでたが、機熟さず見送りとなり今年を迎えた訳である。

そこで本会では、望月評議員を中心として評議員会において慎重審議を続け、十月七日の役員会で名誉会員等推薦に関する内規を定め(会報一四四号参照)これに基づき、各評議員の意見を松方会長がまとめ、その結果日高信六郎、藤島敏男、神谷恭藤木九三の四氏が新名誉会員に推薦されることになった。そして四氏の氏名は十月十四日、創立六十周年記念祝賀会の席上発表された。

よって会の名誉会員は現在の武田久吉、山川黙、辻村太郎、三枝守博、鳥山悦成、中村清太郎、冠松次郎、田部重治、近藤茂吉、植有恒の十名に加え計十四名になった。

故人でも秩父宮殿下、城数馬志賀重昂、白井光太郎、ウエストン、辻本満丸、太平蔵、小島久太、加賀正太郎、高頭仁兵衛高野鷹蔵の十一氏がおられたのみで多くの会員中特に本邦登山界のために功績をのこされた計二十五名がこの名誉を担ったに過ぎない。

以下に新名誉会員四氏の会における経歴と、その主たる登山歴を紹介致したい。

日高信六郎氏

一八九三年四月一〇日横浜市において誕生。本籍は福岡市。東京帝国大学法学部政治学科卒業。一九〇八年日本山岳会入会(会員番号一四二番。評議員、理事、副会長をつとめ一九五八年一〇月〜一九六二年三月会長。退任後評議員、一九二七年仏蘭西山岳会々員。

一九一〇年九州の鶴見山、英彦山、由布山の登山を皮切りに一九二〇年九月在仏大使館勤務のため渡仏するまで九州の諸山に登り一九二二年第一高等学校旅行部の創立に参画し、男体山、地蔵、鳳凰山、赤城山、燕、檜、穂高、白馬、立山、白峰三山、秩父、妙高山、武尊山、立山、白砂山等に足跡を印した。滞欧中一九二一年、モンブラン登頂。一九二七年再度渡仏時グリーンデルワルト周辺、ピレネーをさぐり、一九三三年二月南京総領事として滞支。一九四三年中央アジアを経てローマ赴任(特命全權大使)。後一九四五年五月まで北伊コルチナ・ダンベツツ等に滞在ドロミチの山谷に遊ぶ。一九四六年三月帰朝。戦後は内地の山々を丹念に歩き、山岳会の講習会、地方支部の山行、国体登山等に率先して参加。後進の指導に尽した功績は極めて大きい。

また永い海外生活から得た国際的視野にたつて発展途上にあつたが国海外登山のため、長年月に亘って尽力されたことは、多くの人々の忘れ得ぬところである。現在も日本山岳協会海外登山審議委員長としてうむとところがない。

「山岳」に寄稿されたものは、初期の武尊山、白砂山等があり、戦後にはギド・レイの評伝、ギド・レイの翻訳タルタランの死、マッターホルン登山鉄道等がある。会報への寄稿は特に戦後において枚挙に遑がない。また「山日記」にも寄稿がある。(次頁へ)

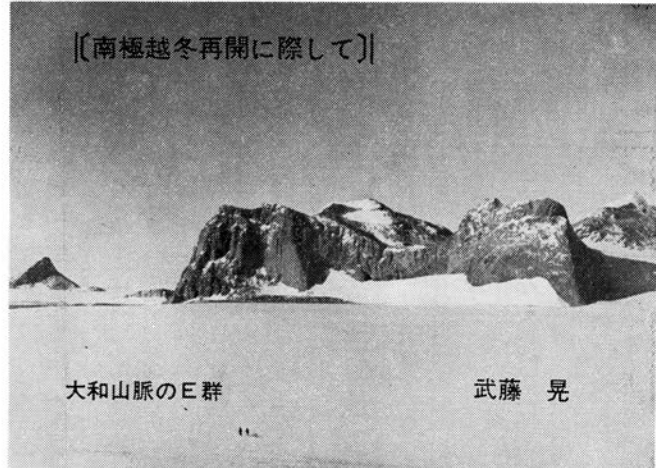
昭和三十五年一月、もう再び見る事が出来ないとい、振り返り振り返り晩に焼きつけて別れを惜しんで来た昭和基地に、再び

しかも越冬隊長の重責を負って出かける事の出来る幸運に、感激すると同時に、御後援下さった多くの方々、心から感謝しております。

国際地球観測年に参加して始まった日本の南極観測も、今度は日本独自の観点から、学問の諸分野に亘って半永久的に観測を続行する事になりましたが、日本が観測船宗谷の老朽のため、観測を中止しておりました昭和三十七年以来、南極の各国の発展は目覚ましいものがあります。

中でも米、ソは其の国力に物を言わせて、年々其の成果を挙げております。一例を挙げますと、東南極の最も調査の遅れておりました昭和基地の奥地に、米国は五年計画で極点から「ジグザグコース」で調査旅行を始め、最近の情報に依ると、今年は東経三十五度南緯七十五度附近の約四〇〇〇米近い

〔南極越冬再開に際して〕



大和山脈のE群

武藤 晃

氷帽の上に、「プラトー・ステーション」建設の計画が進められております。

一方ソ連は、昭和基地東方三〇〇キロの「マラヂョーディアナ」に南極最大の基地を建設中で、それに呼応して「ポストーク」から到達不能極点を経て西行し、反転して「マラヂョーディアナ」に北上する、大調査旅行を完成しております。

ゆっくりと腰を下ろして大休止した日本観測隊には、人跡を踏まずに調査旅行をする場所が次第に狭くなって参りました。第七次観測隊は、四十名の隊員中十八名が

越冬し、地球物理、生物、気象を中心に、日本隊特有の緻密な研究を進めると共に、今回開発された約九トンの雪上車一台のテストを兼ね、在来の二・五トンの雪上車と共に約三〇〇〇ヤード近い調査旅行と数年後の極点旅行のための「デポ」設置を計画しております。恐らく四千米近い高度と零下六十度前後の寒さがわれわれを待っている事でしょう。

再開のもう一つの大きな仕事は、将来に備えて約十棟の建物を新たに完成する事です。又南極観測の効率と安全性を増す為に航空機を越冬させる事がわれわれの切なる願いでもあります。

新造船「ふじ」の活躍に大いに期待しておりますが「ヘリコプター」に依る約四〇〇トンの物資の輸送は、天候に支配される事が多く楽観を許しません。

毎年繰り返される南極観測には経験者と同時に、新進気鋭の若い南極を熱愛する登山家を多く必要と致します。唯今は、国立科学博物館極地部で準備を進めておりますが、やがては極地研究所の様な機関が必要となって来る事でしよう。

南極観測は如何に準備され、如何に実行されているかを見られる事が、南極への路の第一歩であると思ひます。志ある方々の御出でを御待ちしております。

(完)

一、伊藤秀五郎、深田久弥、成瀬岩雄、織内信彦、坂江善治、山崎英雄、杉野目次、後藤幹次、入沢文雄、三田幸夫、堀田弥一、高木正孝、日高信六郎、喜田壮太郎、交野武一、加藤泰安、神谷恭、伊倉剛三、野口末延、小島六郎、折井健一、松本義夫、村尾金二、望月達夫、名須川浩、青木晃、山川勇一郎、山下一夫、近藤雄、佐藤久一朗、川崎精雄、井上綱等^{（註）}の諸氏におよび交友の範囲でも洵に多彩を極めてゐる。

神谷恭氏

一八九〇年四月二五日信州大町において誕生。一九一九年二月中村清太郎、加賀正太郎両氏の紹介によつて日本山岳会入会（会員番号七四四番）。一九三二—三四年理事（山日記、会報、会計等担当）、一九五〇—五七年および一九六〇年以降現在迄評議員を歴任し、会発展のため尽力した。特に戦後後お茶の水にJAC図書室が完成してからは、藤島敏男、成瀬岩雄、田辺守計、小原勝郎の四氏とはかり毎週土曜日に集る今日の土旺会を開き、爾来その世話人として現在に及び、会員の親睦に資した点は極めて大きな功績と言わねばならない。

氏は一九〇七年頃実兄尚志氏の学友であつた中村清太郎氏の感化をうけて強く山に関心をもちようになり、一九〇九年七月吉田口から富士山に登つたのを最初とし、その後毎年勤務の余暇に妙義山、赤城山、榛名山、日光、箱根に登り一九一九年初めて北アルプスに入り、後木曽駒、甲斐駒、八ヶ岳に登つたが、一九二五年霧の旅会へ入会後は、所謂「低山探勝」に共感を覚え、奥多摩、秩父、大菩薩連嶺の山々および上信越の山歩きに熱中、殊に霧の旅会の名客会員故木暮理太郎、武田久吉両氏からは、多くの指導と影響をうけた。

明治二〇（一八八七）年九月三〇日京都府福知山に生れる。早稲田大学中退後、朝日新聞社に務めた。大正一三（一九二四）年六月日本山岳会入会（会員番号八九三番。多年理事、評議員をつとめ、現在顧問。

（主なる山歴）

大正五年東久邇宮に随行して槍ヶ岳登山、同一四年北穂高滝谷初登、錫杖岳試登、同一三年RCC結成。大正一五年（昭和二年）欧州アルプスのモンブラン、マッターホルン、ユングフラウ、ヴェンターホルン、シニェックホルン、ドロミテ、英国湖水地方の岩場その後冬季白頭山、熱河探検にしたがう。

（主なる著者）

岩登り術（大14）、屋上登攀者（昭4）、雪・岩・アルプス（昭5）、槍・穂高・岩登り（昭6）、雪線散歩（昭8）、雲表縦走（昭10）、登陸行（昭15）、エヴェレスト登頂記（昭29）、垂直の散歩（昭33）。翻訳（峰・峠・氷河（昭8）、エヴェレストの東（昭31）等。（望月達夫）

◆ 高頭家の近況 ◆

十月十四日の創立六十周年記念祝賀会に物故名誉会員の夫人をお招きすることになり、藤島越後支部長を通じて高頭仁兵衛氏夫人にも招待状をお送りした所、このたび御令息の高頭寿久氏より、「（前略）故人仁兵衛の妻イキも、本年三月十三日早朝亡くなりまし。確か明治十二年の生れだったと思いますので八十六才であったと存じます。山岳会の皆様に宜敷くお伝え下さる様、お願い申し上げます」との連絡がありましたのでお知らせ致します。

新潟市関屋、八六二ノ一 高頭 寿 久

松田雄一

(無雪期) 役小角(えんのおすね)十七世紀ごろと伝えられるが正確な記録はない。

(積雪期) Walter Weston (一八九二年五月)

2 北岳(三一九一・四m)

(無雪期) 名取直江(一八七二年夏)

(積雪期) 西堀栄三郎(一九二五年三月)

3 奥穂高岳(三一九〇・〇m)

(無雪期) 鶴殿正雄(一九〇九年八月)

せがあり、日本アルプスを中心とする日本の Five most important and highest peaks の所在地、初登攀の時期、初登頂者の氏名のリストを送って欲しいとの依頼があった。

ところが、こう尋ねられてみてこの種のリストが全くなく記録的にデータとしてまとまっていないことに気がつ

4 檜 (無雪) (積雪)
5 剣 (無雪) (積雪)

ケ岳（三一七九・五m）
 期 播隆上人（一八二八年七月）
 期 榎 有恒（一九二三年三月）
 岳（三〇〇三・〇m）
 期 柴崎芳太郎（九〇七年七月）
 期 三田幸夫（一九二三年四月）
 但し柴崎氏は頂上で八世紀頃の遺物を発見した。（以上）

恒例の「忘年会」を次のように開催いたしますから奮ってご参会下さい。準備の都合がありますから出席の方は予めお申出下さい。

お知らせ
会報が月刊となり、
軌道にのりはじめまし
た処、多くの会員各位
より、会報綴込みのフ
ァイルの製作を希望す
る声がかかる様にな

ろ、次の様な返事を頂いた。この中で最も苦勞されたのが富士山の初登頂の記

一、とき 十二月十五日(水)
午後六時三十分より

一、ところ 本会ルーム

一、会費 金三〇〇円

プレゼントの交換がありますから、自
田見当の品物に手紙を添えてご用意下
さい。

では、津田評議員を通じて前回同様オニツカ株式会社へ交渉致しましたところ、同社の格別のお取り計らいで今回も一、〇〇〇部を会に御寄贈頂けることに

このために大枚四千円を投じて、和歌
森太郎著「修驗道史研究」をもとめ、
役小角の事蹟まで調べられた由であ
る。折角まとめられたリストなので手
紙の返事で終らせてしまつては惜しい
と思ひ会報に残しておくことにした。

× × ×

富士山（三七七五・六m）

では希望者（本年度会費納入済の會員
一名一部限り）に先着順にお送り致し
度く存じますので、送料60円也（切手
にて願います）を同封の上、お申込み
下さい。尚各支部にて希望部数を取り
まとめ一括お申込下されば幸甚です。
尚部数に限りがありますので万一品切
れの節は御容赦願います。（松田）

◆日本山岳協会の新組織について 各支部、団体会員のあり方

日本山岳協会の新しい方針については会報二四三号に松方会長から説明された通りであり、本会としても、この方針にそって努力中ですが、本号会務報告欄に日本山岳協会臨時役員総会報告（一六頁参照）に述べられている通り、十月二十二日付をもって新しい協会の規約は発効することになり、具体的に組織づくりが開始されることになりました。

これに基づき、日本山岳協会では十一月五日付をもって各県体協を通じて各県体協加盟の山岳団体に對し、協会加盟の呼びかけを行いその申込を昭和四十年一月十五日をもって締切り、二月五日に第一回の全国評議員会を開催し、新しい組織でスタートすることになりました。

戦前の日本山岳協会は、全国組織ということとは無関係に一つのクラブとしての活動に徹していればよかったのですが、戦後昭和二十一年六月二十二日の常務役員会において「本会の現状に鑑み、且つ又現下の状況に應じ、会の機構を拡張し、全国的に会員を獲得し、全山岳人を包含せる組織の上に多角的なる活動を開始する方針を決定す（会報一三六号参照）」との決議をなし、同年に全国組織をつ

るために設立された日本・登山協会と合体し、昭和二十一年九月に日本山岳協会の名に於て日本体育協会に加盟することになり（会報一三七号参照）、こゝに本会は社会的にも非常に多くの責任を負うことになって今日に至ったことは御承知の通りであります。

むかしの登山界は同じ環境、あるいは伝統で結ばれた同好の者でできあがっていて、一般社会とはある間隔をもって独自の動き方ができましたが、現在の登山界は複雑な利害、善悪を含んだ社会との接点が増えつつあります。

登山者としては、こういう問題に拘らず、独自の道をすすむという考え方もありますが、山から大きな恩恵をうけてきたわれわれとしては、その場で多くの不幸事の起っていることを見捨て、よくということはできません。というよりもむしろ、よりよき登山界の発展を考える必要があります。本会の立場としても、全国の登山者のために率先してお手伝いする必要がありますと考えられます。就きましては各支部ならびに本会の団体会員におかれては、早急にそれぞれの都道府県に於ける「新しい山岳協会の組織する県体協加盟の山岳団体」（県山岳協会

又は県山岳連盟（注）に積極的に加盟されることを切望致します。

（注）現在、県体協加盟の山岳団体の名称は、概ね県山岳連盟という名称を使用しておりますが、この場合においては、全日本山岳連盟傘下の下部組織とし

ての県山岳連盟ではなく、新しい日本山岳協会を組織する県体協加盟の県山岳連盟と理解されるべきでありましょう。

○次にこの関係を更に具体的に図示しますと、A表の様にJAC支部も一般山岳団体と同じ一つの単位

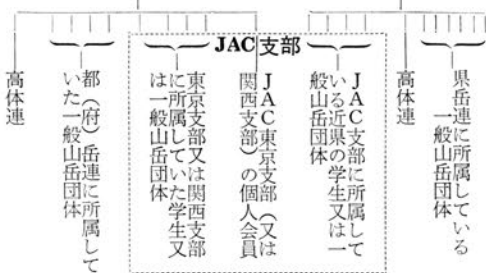
県体協加盟山岳団体

（A表）



兵庫、神奈川等の近県 県体協加盟山岳団体

（B表）



の単位として加盟することであり、次に東京、関西、京都、西の様に多都府県に亘る支部の場合、図示しますと、（B表）の様に個人会員の他府県に住んでいる会員の間に、JAC支部の所

在地の県に加盟することになります。団体会員の場合には、夫々の県の県体協加盟団体に入るようになります。これは一見矛盾している様にもみえますが、日本体育協会の組織が県単位で、県体協の積上げ方式をとっているために、この様になる訳であります。

以上各支部、団体会員の新組織に対するあり方について説明してまいりましたが、社団法人日本山岳協会は、日本での有数のクラブとして将来とも存在し、クラブとしての団体会員が加入していても一向に差しつかえない訳であります。以上で説明を終りますが、この問題について質問なり疑問をお持ちの方は、本会より協会の役員として出ている加藤、辰沼、大塚、松田の各常務理事まで直接おたずね下さい。尚、各支部、団体会員で態度決定の節は、念のため事前に本会理事会まで御連絡下さるようお願いいたします。

（加藤泰安）

二四三号訂正

★4頁4段目最後から7行目の瑞巖良居士は瑞巖（ガ）ンとする。

★15頁3段32行 白嶺院照月久影居士は、白嶺院融月久影居士と訂正して下さい。

日本山岳会 60 周年記念山行一覧表

支部名	日 時	場 所 ・ コ ー ス	参加人員	本部からの派遣者	記録掲載 会 報
東京	11/3	箱根明神岳	65	神谷他	No. 246
関西	10/23-24	大津ユースホテル・比良	31	吉沢	No. 248
越後	11/3	捲機山(雨のため禅寺見学, 懇談会とする)	77	山崎	No. 247
福島	11/3	吾妻山群(吾妻小屋, 高山, 土湯)	25	一	No. 247
山形	11/3	蔵王(集会, 観光ホテル)	16	渡辺(公)	No. 247
宮城	11/6-7	白山岩間ヒュッテ	20	沼倉	No. 247
川崎	7/11-78日間	県境縦走(1000軒, 支部発足20周年記念)	本隊5名	(サボート隊5名)	No. 248
信濃	10/2-3	立山ベルグハウス集会, 立山3山, 奥大日岳	18	加藤(泰), 望月	No. 247
富山	11/13-14	夜叉神峠, 広河原, 大樺沢	45	松方, 松田他	No. 248
山梨	11/13-14	寸又峽	68	三田	No. 248
静岡	11/20-21	阿蘇瀬の本高高原-久住登山	13	成瀬	No. 247
熊本	11/7-8	九重山荘, 弥彦山	20	模	No. 248
福岡	11/6-7	白岩山	7	成瀬	No. 246
秋田	11/7-8	阿蘇約一筋湯-九重山荘, 福岡へ合流	7	模	No. 247
大分	10/24-25	名古屋集会, 長良川上流ハイキング	(集会)50 (山行)15	深田, 加藤(泰)	No. 248
東山				一	

六十周年
記念山行
について

会の創立六十周年を祝う事業の一環として、各支部で別表のような、地方色豊かな山行や集会が行われました。これは、本部から各支部の催し物に参加し、一層有意義なものとなります。

た。それに参加しました本部役員の方々の報告によれば、各支部での話題の中心は、新協会の発足のことや支部会員の諸氏の日頃持っている本部への注文といったようなものが多かったようです。(大塚)

各支部よりの報告は到着順に掲載していきます。

東京支部

午前10時集合予定の道了事前に、東京からの参加者をのせたバスが到着したのは、それから一時間も過ぎてはいたが、一足先に出た御老体組を追ってたぐりに出発。

杉木立も見事な境内を抜けてしばらく上ると、道は明かるく開けた丘陵にでる。薄の穂が風にゆれる。心配していた天候も今日一杯は十分持ちこたえそうでもあり、深まらぬ秋の気配をめでながら、三々五々、なかなか談笑のうちに明神岳頂上に着く。午後零時五十分。

若いハイカー達の騒ぎを避けて、山頂から少々くだった陽溜りの窪地に集合。持参の弁当を開く。昼食後、沼倉実行委員長の挨拶、神谷老の四十年前の箱根の山旅の想いで話を聴き、曾原氏の唱道で山岳会発展の願いを込

めて万才三唱。たゞし、氏の「大日本帝国じゃなかった、日本山岳会」には全員大笑となる。

一時雲も途切れ、思いもかけぬ新雪の富士が現われて、この和気あいあいの集会に興味を添えてくれる。

やがて、ゆるやかに伸びた稜線を経て明星岳、二時半。少憩の後、強羅にくだり解散したのは四時半。参加者全員が無事に楽しい記念山行を終えた。

参加者

(文責松永)

水田健之輔、菊地文雄、鈴木淳平、村井米子、清水周一、坂本肇、坂本宣子、松下肇、神谷恭、佐藤一美、佐藤童子、二上陽子、遠藤都子、伊藤博夫、永原輝雄、青木宏悦、酒井志津子、金沢功子、安彦隆一、安彦登志子、安彦嘉子、安彦隆一、安彦哲子、吉武正子、伊藤和子、曾原喜久蔵、池元善秋、松尾良文、滝島清、牛嶋信治、金坂陽子、金坂春樹、松本熊次郎、中河与一、鈴木英一、沼倉寛二郎、松田雄一、都筑竜、都筑多美子、都筑あり子、都筑たかね、古沢肇、内海皓也、藤野悦也、飯田誠、木下是雄、高遠宏、関口周也、南宮基、進藤波男、浜田精、浜田一馬、勝田房治、油谷次康、斉藤桂、山内蔵山内恵美、三浦義明、川井通子、秋田しおみ、本田園雄、鈴木邦之、山口節子、富田美知子、松永敏郎

(以上六十五名)

秋田支部

当支部の記念登山は一月二日、三日に駒ヶ岳において実施する計画で予告したのであるが都合によって一月六日、七日白岩岳に変更した事を御了承願うとともにつぎのように行われたことを報告します。

六角角町の旅館において本会から成瀬評議員を迎えて談話を聞き東北の山の特徴や今回登山する白岩岳及び

その周辺の山についての概略、或いは温泉の話など「なめこ汁」に舌鼓みを打ちながら消灯まで続けられた。翌七日は危惧された天候もよい具合に高曇りとなりまづは大丈夫と判断された。初め白岩地区に宿泊する予定を変更して角館に宿泊したので、バスその他の事情を勘案しハイヤーで登山口まで乗り入れることに変更し、途中車を停めて大蔵山南面の安山岩の柱状節理を見る。果道は白岩までであるが果道から分岐して齊藤川に沿ってとりつけられた林道を遡行して小屋森の南東地点で行き止まりになる。こゝから入角沢に沿って登行する。こゝあたりの一月はすでに紅葉はその大部分が落葉し、色が褪せてからうじて残り漸くことについてははらと落ちてくる。

酒巻台(標高四〇〇米)に出ると、一帯は落葉松の植林地帯でその黄葉が目に入る。また角館盆地はさながら箱庭のようである。また中央を玉川がのりく走り下り流れる。遙かに東北の雄峰鳥海山が遠望されその七合目附近以上は白銀一色で装われてる。獅子小屋(標高八八〇米)附近一帯はぶな帯で、これはすっかり落葉して見通しがよく樹皮の色彩はまた格別である。

尾根(展望台になっていて標高一〇〇米)に出たたんに北西側の境界がひらけ秋田駒ヶ岳、田沢湖、朝日岳などが目にとびこんでくる。前方遠くには太平山、森吉山、乳頭山、八幡平などの山々が並んでいる。

白岩岳頂上(標高一二三〇米)は樹木のために遮ぎられて眺望がきかず、白岩薬師(標高一五九米)に向った。白岩薬師の頂上には薬師神社がある。これは明治一三年七月一九日の建立と読解された。毎年旧四月八日には附近町村の善男善女がお薬師様のお祭りにこの山にでかけてお詣りする信仰がある。

白岩薬師からの眺望はなお素晴らしい。和賀岳、薬師岳をはじめ奥羽の山々が望見された。こゝで早速本会本部から支部に贈られた会旗を掲げて記念撮影の初め。(星食)

東北の初冬は次第に寒さを加え気温は四度Cでありそれに五米内外の風があり汗ばんだ身体には一層寒さを感じられる。

杉の生長はこゝあたりでは標高七〇〇米地点までが限界とされているとのことであるが、この山の頂上には一本の杉の自然生が見られた。それは幾星霜の風雪に耐えてきたものであるうが樹高は一〇・五米内外と目測された。これを見ると七〇〇米限界ということでは、現に獅子小屋にある二本の杉は直径七〇センチメートルと目測された。

帰路は別の道(登った道の北方)を下降した。この道は刈り払いが悪く足場もよくない場所があったが、距離は近いので予定どおり白岩につき、予定されたバスに乗りそれぞれの交通機関により家路を急いだ。

(参加者)

成瀬岩雄評議員、柴田、高田、武田、佐藤、佐々木、藤田、コースタイム、角館七・〇〇車、七・三〇入角沢、八・一五水場八・三〇九・〇酒巻台九・一五九・四五獅子小屋一〇・〇〇一〇・〇〇白岩岳一〇・一〇一〇・一〇一〇白岩岳(屋敷)一二・一五一二・二五白岩岳一三・〇〇獅子小屋一三・一五一一・五三〇白岩前郷

(高田)

その後、越後支部、富山支部、石川支部、山形・宮城支部(合同)熊本、福島、大分から報告が来ていますが、次号掲載の予定。尚原稿未着のものは二四八号に掲載いたしますから至急お送り下さい。

『研究』

日本の
アルビニズム
(1)大島さん
を中心に

安川茂雄

十月十四日夜、折悪しく雨であったが、丁度青嶂から上京して拙宅に顔をみせた佐伯富男を誘ってJ・A・Cの六十周年記念パーティが催される椿山荘に夕刻でかけた。いつもいつも集え連絡をうけとりながら会合に出席したことがない。どうせ閑なだし、いくらだって時間はあるのだがJ・A・Cの大先輩の大勢いる集會へ顔をだすのが、なんとも面映ゆくてならないのである。

その席上で頂いた会員名簿によると、私の会員番号は二四一八番、一九四六年十一月に入会したことに記されている。もうかれこれ二十年になろうとしているわけであるが、どんな動機で入会したのか、いまはつきり覚えていない。うすうす記憶しているのは、戦後すぐ東京支部の委員になって同時に入会したのではなかったろうか。そんな席上にくどくど出席して、はじめは渡辺(公平)さんなど大先輩とお会いしたのではなかったらと思う。だが支部委員として、もっとも当時にもしなかつたらしく、もっとも当時二十才をやっと越えたばかりの若僧だったのだから無理もないだろう。

こんどの記念会に出席したのは、しかと日本の山の先覚者の風貌に接したかったのが一つの目的であり、期待であった。ことに大正末期から昭和初期にかけて日本アルプスの岩と雪にスボ

1ツ・アルビニズムの昂揚に活躍した人びとを仰視したかった。

つまり私の内心の率直な期待は、かの大島亮吉(以下敬称略)と共に山に登った人びとへの狂おしいばかりの思慕なのであり、深くひそやかな畏敬のおもひなのだ。いやむしろ羨望と嫉妬のおもひと云った方が的確かも知れない。板倉勝宣についても好きなものは、大島亮吉が尊敬していたアルビニストであることによるのもよい。アルビニズムの世界で、芸術の世界におけるように好きだのなんだのというのはいくらも供つぱいことであり、山好きは山歩きが好きなら十分のはずなのだろうが、どうも私はそうはゆかない。どんな欧州のアルビニストよりも大島亮吉が好きなのである。一度として接したことのない、私がほんの幼児の頃に山で遊いた——それも現在の私よりも十才以上も若くして物故した一人のアルビニストに、そんな気持ちを抱くのは自分から不思議なのである。決して偶像崇拝的なものではなくて、私の山への接点を支える欠くことのできない存在なのである。

例えば山の本でも「わが一本」というならば、私は躊躇なく「登高行第五年」を挙げるだろう。私の書架には同じ本が三冊ある。この一本こそ「大島亮吉編輯」によるまぎれもない部報なのだ。それだけにこの一本には、彼の好みと神経がビリビリと注がれており、いくど読んでも厭ささせない。まさしく日本のモダン・アルビニズム黄金時代の収蔵と私は信じている。

それにしても「登高行第五年」は、はじめ「オックスフォード・マウンテンヤリング・エッセイズ」のごとく十周年記念出版として単行本形式で上梓される予定だったらしいが、いまと違って本当に惜しい気持ちでならない。この一本の中に田部重治の「山は如

何に余を影響しつつあるか」の一文が掲載されているが創刊号からの転載であった。大島自身であろう「編集委員」が「前書」としてこの一文への傾倒を述べて、同文中で、「われらは我山においてはお互に一人の登山者が親しく山登りについてのひとりの心の深い動きを示されたことではない」とある。私にとって田部翁は、この一文によって畏敬すべき大先輩となつたわけである、と云っては、翁にたいして非礼であろうが嘘ではない。この幾年間か、翁宅を訪ねたり、町でお会いするたびに執拗にこの経緯について訊くのである。「本当に大島さんにお会いしたことがないんですか?」すぐく先生を尊敬していたのです。一度ぐらいいお会いしたでしょう。手紙ぐらいい貰ったでしょう?」と繰り返すのである。だが翁は、まったく記憶にないというのが、常に私への返答なのだ。

「いや、わしは知らんわ。大島という名前にはいくらか覚えはあるかも知れませんが……」

と、その日のご機嫌によつていくらか返答のニュアンスは異なるけれども私の期待するご返事は今後ともえられそうにもないかにみえる。

そのあげくに、翁のあの一文が如何なるモチーフによつて書かれたかについて私は追究せざるにはいられなかった。すでに「わが山旅五十年」の自伝によつて山と生涯の機微は明細に記されているのであるが、この有峯から太郎兵衛平、薬師岳への山行は明治四十二年夏のこととされている。それはそれとしてもこの一文の宗教的香気を放つかにみえる自然観照の核心が私には把えがたく、そのモチーフについてお伺いしたところ、明治三十八年六月の許嫁の死のためであったと明かにしてくれた。そのときいくらか微睡の態の翁は、机上の簞中より一枚の古びた

写真を取りだして私に示したが、それはまぎれもない一人の可憐な娘の姿で、彼女こそ「山は如何に……」を翁に書かした許嫁だったわけである。大島亮吉がはたしてこの事情について知悉していたかどうか、恐らく知らなかったとおもう。だが、そのように山への観点を直覚した彼の精神がひどく貴重なのである。(未完)

白山で遭難した昭博君

—会報二四四号参照—

亀田与三次

去る十月十六日、今年最後の遺体捜索に、小松地区、金沢地区、松任山岳会、金沢雪崩山岳会、県警本部の五班からなる七十数人の捜索隊と、これに協力して昭博君を捜そうと果内の山男と数人の女性も交えた友情の人達で百二十人を越える大捜索隊が編成されて雨を吹き白山に出発した。

然し無情にも山は吹雪となり、朝の気温は氷点下五度満山紅葉の弥陀ヶ原、エコーラインで二十センチ、南亀ヶ馬場で十五センチの積雪で、「見つかるよ」と祈りを込めて搜索を始めたが道松を被った雪は堅く氷結して、掻き分ける手を突刺した。「夏姿のままの昭博ちゃん、この凍った雪の下で冷たかろう」と白い視界に施す手もなく女子隊員の一人が眼蓋を押えていたという。

翌十七日は奇蹟的に晴上ったが、意外に深い新雪に阻まれて、今年最後の願いを込めて行われた友情捜索も又空しく終わった。この山の何処かに眠るのが子の遺体に積った雪を除くかのように、そつと遭難碑を払う父征雄さん、淋しさは隠せないが、悲しみの父の心を支えたのは、この白雪の白山に集った友情に違いない。「足を鍛えて来年もきつと来る」——眼鏡越しに征雄さんの眼がキラリと濡れる。その父の姿に捜索の隊員達も眼を押えた。心残して下山する捜索隊を追うように、雪は白山の中腹防新道中飯場近くまで白く染めていた。(終り)

東京支部

第11回スキー講習会

—開催のお知らせ—

毎年好評裡に回を重ねてきました東京支部主催のスキー講習会を下記のように開催いたしますから奮って御参加下さい。

期日	昭和41年1月15日～17日
出発	1月14日午後8時
帰着	1月17日午後9時半頃
場所	長野県上高井郡山田温泉
会費	4,500円(非会員5,200円) (往復バス代、宿泊費)
定員	80人
宿泊所	山田温泉・山田館

(注) 満員になり次第締切りますからお早目に御申込み下さい。詳細お問合せ下さい。
(係) 東京支部・安彦六郎・関口周也

ドンジェク峰 (3780 m)

の初登攀と

アラスカの山

芳野 越夫

芳野 菊子



今夏、米国電気学会の招聘を受け、ワシントンDCに行くことになり、また同時期に北米北極研究所 (Arctic Institute of North America) 通称 AINA の研究員として招かれ七月廿日羽田をたち、カナダニューコン州、セントエライアス山群にある、同研究所 (Cecil Ranges Research Project) 通称 IRRP のデバイドキャンプに約一ヶ月滞在することになりました。

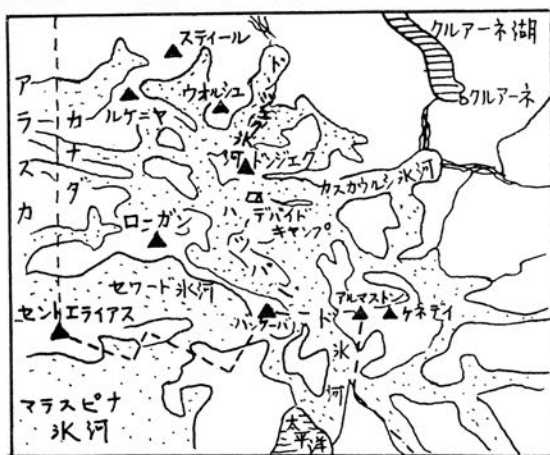
このデバイドキャンプは南流するハッパード氷河と北流するカスカウルシユ氷河が太平洋と内陸に向って分岐する広大な氷原の一隅に在り、高度は八七〇〇フィートあり、常時六名以上の科学者が滞在しております。

我々はここに約三週間滞在し研究の合間を見つて、更に IRRP のディレクターであるウォールター・ウッド博

士のすゝめもあって、キャンプの前面に連なる Icefield Range の未登峰に登る機会を得ました。

八月六日、この山群の中央のドーム状の無名の峰をめざし、取付点から七時間のアルパイトでこの頂上に立つことができました。この山の位置はドンジェク氷河の源頭氷原の中央に軸のように突出した山で、美しいドンジェク氷河源頭を隔て、ウォルシユ、ルケニア、ステイール等の山々と相對峙している。またローガン南面を除いてセントエライアス山群の殆んど全部を望む絶好の位置にあり、一点の雲も無い好天とあいまってこの山群を充分に観察できた。この登山については会報二四三号の会員通信ですでに精しく報告してあるの

で、詳細はそちらをごらんください。後日、さやかではあるが、この山群における日本人による初登攀として、ニューコン州府に命名の栄を与えられ、その位置するところから、McDonick (標高は約一二四〇〇フィート) と名付けることとした。目下カナダ中央政府の地理調査局の正式な登録手続きを行っている。八月十三日、ドンジェクより一つ北側でクルアネ氷河の源頭に近い巨大



セントエライアス山群

以下、この旅行において気付いた点をいくつか挙げて、今後アラスカに行かれる方々の参考供したいと思う。

第一に交通であるが、アラスカ、特にニューコンにおける交通は非常に不便で、たまたまバスが使える他は、自動車

を自分で運転するより他に方法はない、時には飛行機によるより他に方法が無い場合が多い。

我々はハーツ社のレンタカーでアソナレッジ空港より約七〇〇マイルを一日半でクルアネへ行き、約一ヶ月のデバイドキャンプ滞在中はホワイトホース市の同社のガレージにその車をキープさせ、帰途は約二〇〇〇マイルを走り、最後に空港でこれを返した。車はフォルクスワーゲン一二〇〇セダンで、故障無く無事に走れた。

道路はアラスカの四つの国道はところどころ地震のため途切れているところもあるが、大体舗装されており、その改修も急速に行われている。しかし

一歩カナダに入るとすべての道は砂利道で、晴れば物すごい砂ぼこり、雨が降ると泥まみれとなる。アラスカでも国道を一歩外れるとすべて同様である。

路面は比較的平坦であるが、すれ違い、追越し等の時、他車のはねた石が飛んで来て、ヘッドライト、フロントガラス等は疵だらけになってしまう。レンタカーの価格、ガソリンの値段等は他州に較べて約六〜七割高い(フォルクスワーゲンは一四〇ドルの他マイル一〇セント)が、以上のような道路事情もあって止むを得ないと思う。しかしレンタカーは名のある会社のもので、安い車での長距離走行ではトラブルが起きやすい。アラスカでの車の値段は非常に高い。中古車は悪路を長距離運転するためにガタが来易く、新車以外は大いに注意をしたい。

運転については、一日の走行距離が五〇〇マイルを越すこともあり、砂利道のカーブが多い点と、制限速度が五〇マイル以上の高速であること。その上人家と人家の間の距離が時には一〇

〇マイル近くもあるので、日本で充分に運転に必要、相当程度の整備のできることが必要で、なま半可な運転技術と知識は事故のもととなる。

アラスカでは登山のための設備は全く無い。従って荷上げに当ってポーターをやとうこともまったく不可能であり、その上長い氷河を歩くことは大変な時間のロスでもある。特に上部の巨大なヒドンクレスバ地帯は非常に危険である。また氷河にとりつくまでは、熊の巣窟で敷きこころでは無い。従ってどうしても飛行機をつかわねばならなくなる。我々の場合は AINA の飛行機を使える立場にあり、特別な例であったが、セントエライアス山群、ルカーナ(ゴキヤナと呼ぶ)にいるジャック・ウィルソンが、この地方で第一人者とされていて、大部分の日本隊が彼の飛行機によって目的の山の麓の氷河上に空輸されている。彼のブッシュパイロットとしての技術は第一級であるが、価格は他の二流とされている連中に比較して高く、一時間五五ドルである。しかも、天候の急変、雪や氷河の状態によって引き返すことも、荷を減らすこともある。有名な彼でもあるので、他の契約も多く、そのような時に、予定によっては他の先約の仕事に先に済ませるため、しばしば一週間位の出費がかかることがある。そのため意外の出費が強いという。各隊の最大の出費は空輸代で占められている。

また空輸のためには梱包はなるべく軽く、かさばらないようにする必要がある。特に簡単に空輸梱包に切換えられるよう、内地から考慮して荷造りしておく必要がある。

なお四〇〇フィート以上の高度の氷河ではヒドンクレスバが多いが、これらのヒドンクレスバは飛行機から見ると良く識別できる。しかし氷河上を

歩くときは非常に識別し難いので、ルート上の偵察も事前に機上から充分行っておかねばならない。

第二に登山時期、氷河、天候について気付いた点を述べる。

A I N A のデータによると現在この地域の氷河は急速に変化しつつあり、特に今年は大きい氷河の上部のヒドンクレバスが急増している。これらのヒドンクレバスは、時には谷を横切って長さ数マイルも続いており、これがいづつも平行している。昨年関西学院隊が歩いたカスカウル上部と、ハッパード上部は巾数メートルのヒドンクレバスが二〇米位の間隔で谷一杯にはいており、通行不能となつてしまつた。そのような点から見ると七月上旬までを登山時期と考えるべきであらう。

天候は五月頃より七月上旬までが良くとされているが、年による変動が非常に大きく、この山域に過去三十年以上入つて居るウォールター・ウッド博士によると、彼の多くの初登攀が八月上旬に成功しているとのこと、このことから登山時期を一がいに決定できないように思う。因みに、今夏は七月下旬に五日間、八月上旬に約十日間の快晴が続いた。

天候の判断は非常に難しく、キャンプで毎日観測をしている気象学者達も殆んど誤りした天気予報を出すことはできないと言っている。気象のデータも乏しく、従つて天気図をかくこともできない。気象電報は高速電信とテレタイプで送られていて、モリス符号を知らないといふ受信は困難である。従つて、約一八〇マイル東方にあるホワイトホースの天気予報を受信することしかできない。アラスカ州内では、フェアバンクス、またはアンカレッジのラジオ放送以外に受信の方法は無いようである。

第三に通信と遭難であるが、通信は

米国およびカナダでは、夫々の国内電波法によつて日本と同様、外国人の電波発射は一切禁じられている。

アメリカに対しては、近く短期旅行のアマチュア無線家のみ、日本で与えられた本人のコールサインを使用して通信できるような条約が日本政府との間に結ばれる筈であるが、現在ではモグリでトランシーバーを持込むより方法はない。しかし、カナダは此の点非常に厳格であつて、米国からカナダに入国するときに税関でトランシーバーの種となるとの話を聞いている。

日本からの遠征隊は、一般に日本で割当てられた二七メガサイクル帯の市民バンドトランシーバーを持って行つてはいるが、アラスカ、カナダでは、この他に少くとも三ないし六メガサイク

ルの受信機を必要とする。この地域を飛ぶ飛行機は、大体三・二メガサイクルから四・五メガサイクルの波で連絡をとつて居り、A I N A もこの波を使つて居るので、これを傍受することによつて天候、飛行機の運行状況等を知ることができ、また遭難等の場合にも役立つと考えられる。

遭難に対しては、A I N A では氷河上の行動は必ず三名以上のザイルパーティーを組むよう規定している。

地元には一切の遭難救助の組織も、方法も、設備も人もないため、一度遭難が起きたらどうにもならないことになるというところは十分覚悟しなければならぬ。一人で氷河上の歩行、ブッシュ地帯の熊等の危険のため連絡の方法も無く、また麓まで一〇〇マイル以上はなれてい

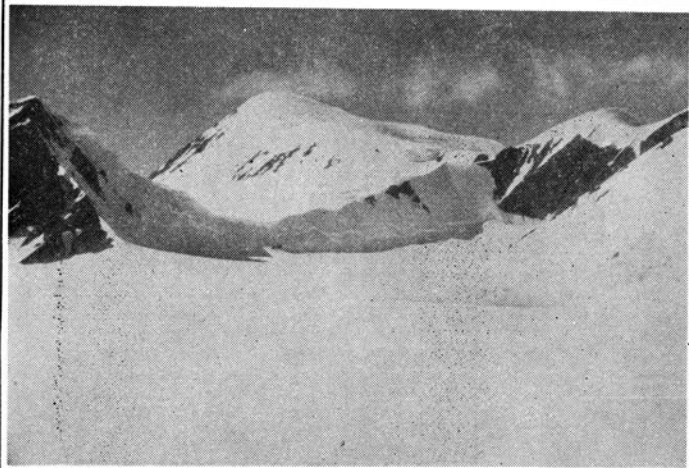
ることも多いので、トランシーバーもとどかない。決して安易な考えでの登山は避けた

第四にこの地方に出掛ける時の注意として次のような点をあげておきたい。

その一つは文明国の登山であると言ふことで、言いかねば、ヒマラヤ、アンデス等の低開国と異なる、我々と同等の文明人の中で登山することに

ハッパードより分岐点となること

い、エチケットの原因等が時に失敗



139°45'01"W
60°50'00"N

西経北緯

★

ハッパードより分岐点となること

い、エチケットの原因等が時に失敗

がある。特に前述したように、こゝではシェルパやポーターをやとうと言つたことは全然でないの、何から何まで自分でやらねばならない。

その二は物価についてである。アラスカはすべての物資を米本土から輸送して来るので、すべての物価が本土の一・五から二倍と非常に高い。そのためドルは羽が生えたように無くなつてしまふ。一般にアラスカは安く行けるとの通説があるようであるが、これは日本からアラスカまでの交通費について言えることで、入国してからの出費はすさまじいものがある。そのため費用は思ひのほか、かゝることをお忘れなく。

その三にアメリカ人の生活習慣である。今度の旅行で痛感したことは、アメリカ人の真面目さであつた。アラスカもカナダも、ハイウェイ沿いのところどころに、無人のバブリック・キャンプ・グラウンドが作られ、旅行者に便宜を考えてくれる。これらのキャンプ地には必ず男女一対以上の便所があるが、実にきれいに保たれ、落書きはついに一つも無かつた。そして紙が必ず用意され、スベアも置いてあり、紙が無かつたと言ふことも一度も無かつた。次に塵埃がないことにも驚いた。

これらのキャンプ地は米本土から旅行者が朝になり混んでいて、ところが多い。一家総出で用意してあるゴミバケツに一家総出でくずすてて出発して行く。そのあとどこにキャンプしたかわからない程きれいである。我が国のキャンプ地のきたなさに比べて大いに考えさせられた。

第五に我々が登り、また眺めたアラスカ、ユーコン地区の山々について述べる。

我々の居たセントエライアス山群では、地図上に名のある山で未登峰は、イトン、バード、マッカーサー東峰

しか無い。しかし、今回我々の登つたような四〇〇米前後の未登峰は無数と言つても良い程残つて居る。その中には、グラント・ジョラスに似たすばらしいパトリックを持つたもの等もあり、我々が飛行機上、あるいはドンジュエクの頂上から見た限り、困難さから云つても、美しさからいっても超一級の山々が多数ある。

しかしこれらに取付くには、飛行機を使用すること、危険なヒドンクレバスのある氷河上の歩行等、高度のアイステクニックを必要とする。人員は、多人数の隊では、飛行機を使用した場合、時間と費用がばかにならないので、現在この山域の登山には三名から五名位の小パーティーが多い。

それ程でなくとも、北側の前衛山脈、たとえばクルーアーネ山脈オールド山脈等に、アラスカハイウェイから比較的近く、氷河もあり、すばらしい岩峰のある山域がある。

我々がドーンソンシティに行き、裏山のミッドナイトドームから北望したとき、約五〇マイル程北を、北西から南東に向つて約三〇〇マイルの間連なるオールド山脈を見ることができた。こゝはゴールドラッシュ時代のたつた一つの道が越えているだけで、全山が未登の山脈である。高度はキャンベル峰が七四〇〇フィートと測量され、その他も七〇〇〇フィートとあるが、エギーニあり、パトリックあり、マッターホルン状の山もあると言つた具合に、すばらしい岩峰が見えたす限り連なっている。現在では山麓までブッシュで熊の危険が大きいと考えられるので、ドーンソンまたは、東一五〇マイルのマヨからヘリコプターで入るより方法が無いが、これから開拓される処女山地として大いに興味ある山脈である。

次にフェアバンクス、カナダ国境間

い、エチケットの原因等が時に失敗

い、エチケットの原因等が時に失敗

のアラスカハイウェイの南側に連なるアラスカ山脈をあげる。この山脈の中央をリチャードソンハイウェイが横切っており、アラスカ氷河のある山の中で最も取り易い山の一つであるとともに、景色が美しく変化に富み、内陸のため天候も安定して、非常に興味ある山といえる。特に高度約一二〇〇フィートの、デボラ、ヘス、ヘイズの三山は、イザベル峠の東側の山域とともに、楽しい登山ができるように思う。未登峰については良くわからない。

セントエライアス山群の西北にスコライ峠をへだててランゲル山脈がある。こゝは昨年同志社大、今年教育大OBが登っているが、一六〇〇〇フィート以上のブラックバーン、サンフォードの他ドラム、ランゲル等がある。これらの山は休火山で、夫々が独立しており、その間に氷河と谷が入っている。こゝはブッシュニペロットの基地ギキヤナに近いので、飛行機代が安い。一つの山から他の山に移動するときは距離が遠く、飛行機を必要とする。

最後に我々が最も興味をもつて偵察した山脈は、セントエライアスの西方で太平洋岸に沿って連なるチユガチ山脈である。こゝは豊富な降雪量のために、高度は約一〇〇〇フィート程度(最高峰ウィザースブーン、一二二二三フィート)だが、多くの複雑な谷に巨大な氷河が流れ、南流するものは直接フィヨルドの奥で海に入り、東はカパーリバーをへだててセントエライアス山群の巨大な氷河群に接し、岩峰あり、氷壁ありな水河群に近く、北側にはグレンハイウェイが通り、美しいマタナスカの谷、ハイウェイの近くに、マタナスカ、ネルチーナ、タズリナ等の大水河が流れ出している。またトンブソン峠附近には車で氷河の脇まで行

けるウォーシントン氷河、ヴァルデーヌ氷河、海からはコロンビア氷河、コルドバに行くカパーリバー沿いのハイウェイからは、アレシ、マイルズの両氷河へと、登山口には事かない。登山対象として最も食指を動かさる山々である。しかしこの山群は上部の氷河が急でせまく、また大水河もクレパスが多いため飛行機が使えない。その上太平洋からの湿気て天候が不安定で嵐の日が多い。そのためこゝに登る場合、天候がすべての鍵を握っていると言えよう。

その他我々の知らない山に、マツキンレー、ジェノア附近のコースト山脈、グレイシャー湾、アンカレッジの西方にチグミット山脈等の山があり登山欲をそそっている。今年からマツキンレー、グレイシャー湾の国立公園地域は上空の飛行を動物保護のためという理由で一切禁止されたことを附け加えて終りとする。(完)

★ CORDILLERA NORTE ★ — PERU —

上智大学山岳部
(Sofia Alpine Club)

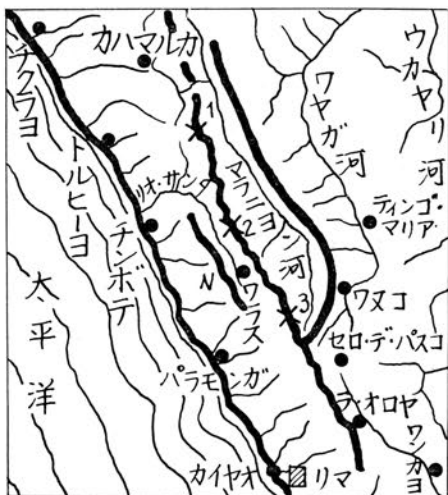
上智大学のこの登山隊(1968 La Expedition Andinista al Peru)が探り且登って来たのは、外国隊も最近では殆んど入っていない山群なので、その登山行動が一応終わった現段階においてその業績を皆さんにご紹介しておくのも意味のあることと考え、ここにその大要を書いてみることにした。

— アンデス通信 No.1 ~ No.4 による —
隊員：隊長、細野淳美(30)、丹沢塔ケ岳尊弘(山荘勤務)、里居基美(25)、高山由比古(24)、横地泰英(23)、木下

周(25)、以上五名。
目標：Quebrada Honda 周辺の山々 Copac (5550 m)、Chinchey (6220 m)、Patacaju (6274 m)、Perilla (5587 m)、Pachacatu (5741 m) および Cordillera Norte の山々の登山と調査。

日誌抜萃

七・一九、ワラス登(目標 Chinchey) 七・二〇、BC (四三三〇 m)
七・二四、C1 (四七五〇 m)
七・二八、C2 (五三三〇 m)
八・〇二、C3 (五七五〇 m) 第一回攻撃、五九〇〇 m まで。
八・〇四、第二回攻撃、強風とガスで引返す。
八・〇五、全員 BC へ。
八・一二、第三回攻撃、六一〇〇 m まで P.C.3 へ退却。
八・一三、第四回攻撃、高山、横地、八・一〇〇 m まで、寒尾根の上に氷の巨塊三ツ、一つは越したが、ビバークサイトなし。
今年にはプランカ全体天気が悪く、従って雪も深く、六三年にアメリカ隊が登った南壁は雪崩の危険が多く問題外、南壁は新ルートだったが前記の事情で退却となる。いざというプランカでは八月は無理と思う。八・一七、BC を出て、ヤナトリック氷河からコバップを狙ったが、これも悪天候で失敗。
八・二二、BC 撤去、ワラスへ。次はノルテ山群へ向う。
八・三二、ワラス発タ方 Corongo 着。
九・〇一、ロンドン発 Akhuacocha (4200 m) に着。
九・〇五、Rosco Grande 氷河の舌端近くの露岩上に C1 (4830 m)。
九・〇七、ロスコ・グランデ (5360 m 地図には 5180 m とあり) に登頂(細野、高山、木下、横地)。
九・〇九、C1 付近の岩峰および雪峰に二人で登る。ともに 5130 m。
九・一〇、Nevado Tanigawa (5240 m) に登頂(高山、横地)。恩人であつても人名付与は不可。Cuello Condor (5360 m) に登頂(里居、木下)。
九・一二、全員 BC。
九・一五、コロンゴ着、ワラスへ。



◇ (注) Cordillera Norte (Le Cor-dillere Septentrionale, Deux cordilleres septentrionales) というのはランカのほぼ北方に連なる山々で、東部と西部に分けられている。東部にある唯一の雪峰 Acotambo (c. 4900 m) は一九三三年に Philip Borchers 隊に属していた Hans Kuntz が登つてゐる(この山の位置、私には不明)尚、Cajamarca の北東 25 km には Cayreg (4273 m) の山群、その南東には Cumulica (4155 m) の山群がある。
西部の方はカハマルカの南西に Chin (4333 m)、南東に Huatanchal (4524 m) それから南東に延びて Huatillas (4947 m) に達し、遂にプランカのある Ancash 県に入つて Pelagatos (4928 m) に至る。この辺は太平洋に臨む海港 Trujillo (シムリ) の東方一五〇 km にある。
この南にあるのが Cordillera Conchucos 又は Huarranca という山群である。この辺には Nevado de Cabana (5186 m) が一番高いといわれて来た。この山群の南部にある 5100 m の峰には Otto Schlaginweit が一九〇八年に登っている。
以上は Club Alpino Italiano 発行

の Rivista Mensile (Nov. 1961) に Piero Meciani が書いたもの、Bernard Pierre de La Conquata du Salentin (1953, Paris) を参考にして纏めたものである。
私が一九六一年に行つたプランカのバカヒルカ山群の北部にある一つのコルドバから Champara (5749 m) の右方遥か北方に、氷河にきりめく一つの山群を望見した。これがいわゆるノルテの一部であつたのである。
上智大学の人がアンデスへ行くにつれて私のところと相談に来た時、私は高度は五〇〇〇 m 前後だと思ふが、余り知られていない山群なので是非これを探つてくると頼み且奨めた。
上智の人達はプランカでは異状天候に遇つて目標の山には一つも登れなかつたが、約東通りノルテの一部ロスコの山群を探り且登つて来てくれた。
前記の古事記みたいなモヤモヤした記録を、上智の人達が何処まで解明してくれてきているか、私は非常に期待をもつて、その詳しい記録と研究の発表を待っている次第である。(吉沢)

ノルテ、プランカ、ワイワシニの直線距離は二八五 km。
Matias Rebitsch
奥国のレビツチが四月に国際隊を率いてチリアンデスのフナ・デ・アンカマへ出かけ、Bernard Morcho 2, Don Conos 等の初登攀をした他、Oros del Salado 山群の全域について写真測量を行ったという。結果の発表が待たれる。(IY)

奥国のレビツチが四月に国際隊を率いてチリアンデスのフナ・デ・アンカマへ出かけ、Bernard Morcho 2, Don Conos 等の初登攀をした他、Oros del Salado 山群の全域について写真測量を行ったという。結果の発表が待たれる。(IY)

たが今から考えるとグリーンランドにはそれらのことがあまり苦にならない悠久としたものがある様に思われます。グリーンランド全島の人口は現在三七、〇〇〇人と云う事です。その内九〇%が西海岸で残り八%がこの東海岸二%が北部と云う分布のようです。私達が滞在した二つの部落では合せて約一、一〇〇人を数えました。この辺りは東海岸の中心地で、かなりのデンマーク人が入っており、想像するようなエスキモー(住民はグリーンランド人)の生活はもうありません。グリーンランド人は私達ととても似ており、彼等も私達には大変な親しみを覚えてくれています。

この辺りの沿岸は奇岸突兀の壁えよろしく非常な数の浮氷と、静まり返った湖面のようなフィヨルド、又海辺際に聳える岩峰、そして氷河と静かなうちに荒々しく、体中に力がたぎっている様な景色が続きます。内陸では延約四〇〇キロの横旅行でしたが、クレバスの為の不安と緊張はありませんが、その景色はすばらしいと云う他はなく岩と雪の色彩の単調さを破ってあまりあるものがあります。(完)

★ コーカサス ★

アイガーの北壁が今度はコーカサスに移るか。来年度、第一平隊と上田哲農隊がうわさのぼっている。今夏はスイスとオーストリアが活動した。(Die Alpen, Sept., 1965)

コーカサスは第二次大戦時、独露の戦場になったが、この時の攻防戦を書いたものがある。題して「Kampf um den Kaukasus」という。何処かで見たいような書名ですな。半分は写真集、ウシユバの双峰を背景に「Traghetto-lonnen」がアザウ大水河の上を動いて行く。山岳部隊も随分苦勞したことであらう。(吉沢)

エベレスト登頂隊時間表 (インド) (CVI~頂上~CVI)

登頂順	登 頂 者	CVI 出発	所要時間	頂上着	滞 頂	頂上発	所要時間	CVI 着
第 1	チーマ、ゴンブ	5.00	4.30	9.30	30分	10.00	?	?
第 2	ギャツォ、ワンギャル	6.30	6.00	12.30	50	1.20	5.40	7.00
第 3	ヴォーラ、カミ	5.00	6.00	11.00	45	11.45	4.30	4.15
第 4	アールワリア、ラワット、ドルジー	5.30	4.30	10.00	30	10.30	5.00	3.30

CVI, 8513m, 頂上 8848m, 高度差 335m. 登り平均 5.15, 1時間 64m, 降り平均 5.03, 1時間 67m (I.Y.)



ゆづれ栗山★

村上金吾

朝の八時すぎ、一関駅前のバス発着所は、須川温泉行の客でかなり混雑していた。かねてこんなこともあらうかと、はじめ日曜を避けたが、天候が変りそうなので、予定を半日づつ、日曜の朝のバスでいって、その日のうちに山へ登ることにした。この人達みたいにいい山に登るらしいのである。晴のよい天気。

バスは定時のほかに二台増発され、だいたいおくれで出発した。一関の街を出て西に一直線、やがて蔵美溪(げんびけい)をとおり、川向いの岩の上に東屋(あずまや)と手前の店との間に針金を張り、団子(だんご)をかごで渡して売っているのが見える。山谷(やまや)本寺(ほんでら)をすぎ磐井川(いわいがわ)を右岸に越してゆく。路面でこぼかひどく、バスに酔うものが続出した。瑞山(みずやま)でしばらく停車、以前はこが栗駒登山口であった。

瑞山の奥の矢櫃(やびつ)ダムをすぎて祭時平(まつときへい)の開拓地にかかる、丈が短かく穂先の軽い稲刈を刈っている人達の表情は暗い。空模様は怪しくなってきた。

真湯(しんゆ)温泉も磐井川の谷間に秘められたよい湯治場だが、バスはその入口を右に見ていきはる山道は傷つけられて、以前のような山の深さは感じられない。

そろそろ須川温泉も近いと思うところ、道路工事のためバスは行止り、二〇〇メートルばかり先の別のバスに乗り替える。雨が降り出してきた。

須川温泉に出たのは正午近かった。団体歓迎などの張出が入口に並び

たいへんな混雑。雨のためだろうか、すぐ山に登る者はほとんどない。私もしばらくためらったが、この食堂で飯を食べているうちに、予定どおり山に登る決心がついた。

温泉を出て蒸し湯のあるところなどを登ったり降りたり、登山口がわからずまごついたが、戻ってきくのもおっくうだし、そのまま歩いていくうちに「瑞山コース」という道標を見つけた。その道をゆく。向うから七、八人の男女のくるのがある。彼等は昨夜駒ノ湯に泊って、山を越してきたという。雨はやみ幸い風もない。ナナカマド、ナヒリノキ、ミネカエデなどの鮮紅、濃黄、それにハイマツ、アカミノイヌツゲなどの深緑を交えて美しい。道のほとりにはシラタマノキの白玉が目立つ。藍色の水をたたえた新噴火口を右に見て、登りは急になる。あとからさっきバスの中で一緒だった盛岡の青年が追いつた。須川温泉側の登山者は私と彼の外には見当らない。尾根の分岐点から左へ、南側の断崖のへりを登ってゆくと頂上である。

「宮城県立自然公園栗駒山頂上」の大標柱が立っていて、そのあたりの地面は露出しているが、そこに小さな石像があり、別に「大日靈尊」と左字を浮彫した石がある。それは登山者自ら石刷の守れをとって帰るためのものである。三角点の標石はひどくいためつけられている。

もときた道を須川温泉へ引返して見ると、まだ一関行のバスがあった。そのバスで山をおりようと思ひ、また予定どおりここに泊りたいとも思うが、まああたり大混雑のなかへ割込む気にもなれず、二の足を踏んでいるところの前方一度とおったところのある秋田県側大湯温泉のただ一軒の草ぶき屋根が頭に浮んだ。そして足は自然その方へ向いた。

須川湖では売店なども閉まって人の気配はない。湖畔を離れて西側へさびしい細道をくだる。前に一度歩いたところだし、最近人の歩いた足跡もある。大湯まで三時間はかかるまい。なんとか日のあるうちに引き着きたいと思う。

しばらくはブナノキの深い林の中をゆくが、気がつくといの細道に添うて、別に刈払いがしてあり、測量のくいが立ったり、遠くでモーターのうなる音がしたりする。どうやら道路作りがはじまっているらしい。栗駒山も真湯の奥の須川岳国有林が切開かれ、バス道路ができたので、宮城県側の湯沢の奥の岳山国有林と、それに秋田県側のこの仁郷山国有林だけが栗駒の深い静かな原始林として残されていたのに、いまやそれもゆざぶられていくのである。その工事中の新道に出た。幅六メートルぐらゐ、作っていたのでひどくぬかる。工事をしていた人の話では、来年は完成して須川温泉までバスがゆくとか。

この新道を大湯まで歩くのではたいへんだと思ったがまもなく右にわかれて旧道をゆくようになりほっとする。途中「佐々木武臣遺難地点」と書いた標木が立っているところがあった。ようやく皆瀬川のはとりに出た。まのあたり大湯の湯煙が暮色濃く谷間に立ちあがっている。しかしせつ々しく期待した大湯も、営業していない。ごちそうもないからと断られた。強い頼めば泊めないこともなさそうだが、あきらめてそれから一時間かかるという子安(おやす)温泉まで歩くことにした。もう日は暮れかかっていた。皆瀬川沿いに、林用軌道の敷設された道を、子安温泉の湯元まで歩いて泊った。そして翌朝そこからバスで奥羽本線の十文字へ出た。

(四〇・一〇・一〇一一)



図書紹介

登高行

十六号

慶応義塾
体育会
山岳部

旧刊紹介となつてしまつたが、やはり会報に紹介しておかなくてはならぬので筆をとつた。

一九六〇年の慶大によるヒマルチュリ登山の正式報告書である。内容は次のようになつてゐる。▽山岳部ヒマラヤへの歩み(三田幸夫)▽ダウラギリ山群偵察報告(石島義二)▽ヒマルチュリ登山報告・ヒマルチュリ登山(山田二郎)・写真日誌・隊日誌・一般裝備(村田茂)・食糧(宮下秀樹・川田善朗)・ヒマラヤ登山と写真(木村勝弘)・隊員の写真・無線・地図(大森弘一郎)▽会計報告▽後援会名簿▽くもの詩▽密林▽高度馴化および酸素反応について(高塩亨)▽別表・行動表・ヒマルチュリの地図。

熱創立百年記念行事として行なわれたヒマルチュリ登山については、すでに山岳五十六年や山田隊長の「登山ヒマルチュリ」(毎日新聞社刊)などでよく伝えられていたが、こん度の「登高行」はその公式報告書として、よくまとまって編集されている。それだけにJACの「マナスル」は別として、ヒマラヤ登山の公式報告書としてはこれまでにない読みごたえのあるものとなつており、報告書としてのスタイルを打ち出している。その中心となつてゐるのは、いまでもなく山田隊長による登山の報告だが、「計画の生い立ち」に始まり「計画の概要」「隊長、隊員の決定」「シムレバの人数と構成」「資金計画」から行動概要、反省と重厚な

タッチで述べられている。

下手なトリミングなどをせずに巻頭からページ一杯ダイナミックにカラー写真をとり入れてあるのも成功で、またとかく無味乾燥におち入りやすいこの種の報告書を密林欄でよくカバーしている。丹部節雄氏の「留守部隊の記」が秀逸。三色ぬり五万分の一の正確な地図も注目される。後世に残る貴重な文献であり、血の通つた報告書といえる。

昭和三十一年十一月慶応義塾体育会山岳部発行、頒価千円。二一〇ページ、写真多数。

(山崎安治)

読史雑考

付・青い目の見た富士山

片山勝著

いわゆる山岳図書の部類に属するものではないかも知れない。著者も山登りとは直接接する者かたではないようだが、「金谷上人行状記」(東洋文庫・平凡社刊)と共に、最も興味を引かれたものの一つであった。そして、「青い目の見た富士山」という問題がついていかなかったら、見落してしまつたかも知れない。

手に取つてまず驚いたのは、東大付属図書館蔵の旧南英文庫蔵書中の「不土山道之記」と題する三冊本の詳細な考証がなされていることであつた。本書は故井野辺茂雄博士が「富士の歴史」(富士の研究I)において○書目において未だ寓目せざるものと記された書物に相当するもので、一般にはほとんど知られていない。その著者輪前亭といふのは、四谷塩町三丁目越前屋治兵衛であり、天保九年七月江戸四谷を出立し、富士登山をし、帰宅するまでの紀行をまとめたもので、その草稿が「富士詣日記」、それを清書

したものが「通票志発日記」、これから「不土山道之記」ができた由来とその内容がくわしく紹介されている。また文政九年七月富士に登つた伊藤常満の「富士せんじやう記」の紀行概要もついている。いずれもかつて「日本歴史地理学会月報」や「歴史地理」に発表されたものだが、とてもそこまで眼のとどかない小生などにとつて、これらが一本にまとめられたことは大変に有難い。そのほか「首のない大日像」「日本橋の土手蔵」「富士山日和見大事」「富士の鶴芝」など興味深い小文がある。

付録の「青い目の見た富士山」は外人の眼に映じた富士についての文章をたんねんに集めたもので、一六五二年(承応元年)スエーデン人ヴィルマルの「日本旅行記」からのものをはじめボーランド人ツッズの「日本教会史」にある「富士山への巡礼」、ドイツ人ケンペルの「一六九二年の「江戸参府紀行」、その他オランダ人スーフ、フィッセル、シーボルト、ペリー、ハリス、オールコックなど二十一人の外人の紀行、印象記が集録されている。サトウやウエストンもむろん登場しているが、(ヘルン(小泉八雲)が明治三十一年富士に登つてゐることは、小生もはじめて知つた。著者は東大講師。昭和四十年九月法學書院発行。二七八ページ、定価四八〇円。

(山崎安治)

アルプス

——山と人と文学——

近藤 等著

近藤氏がこの書を私のところへ送つて来たのは、一種の皮肉が、或いは親切な思い遣りがあったように私には思ふ。といふのはご承知のように、私に書くものは文学とは凡そ縁の遠い無味

乾燥なものばかりで、話の種にはされても、人の情懷を育み、昂めることのない。そのうえ、文学的な面が一つも出ない。そこでこの毒に思つて「私は最近こういうものを書いたから、これで大いに勉強して下さい」と、近藤氏はいつてゐるよう思ふのである。

洵にその通りであるが、私のところにもフリゾン・ロシュの「ザイルのトップ」やレビュファの「雪と岩」などがあり、それらを讀まなかつたわけでもないが、風通しのいい頭の持ち主である私には、少しも血や肉になつていないだけの話である。

ところで氏の近著「アルプス・山と人と文学」を寸暇を有効に利用して読了してみたが、アルプスと文学といふことについて人間との関係を、自説、他説を上手に織り交せて実によ領よく纏めてあるのに、矢張り餅屋は餅屋だわいと、感心したり、驚いたりというわけである。私のように不勉強というより、やぼ用に追われていて、そういう方面のことを研究しているヒマのない人間には、短い時間に大要を知るのに大変役立つ本である。近藤氏の二十一年間に亘る研さんによる労作としてみれば、それも当然であろう。

第一部では、古代から十七世紀までの間に、非情の山が如何に人間に近づいて来たかを示している(モナリザの背景に山が描かれてあることは知らなかつた)。第二部では、ゲーテやシラーも山に関係のあることを教え、第三部では英国のワーズワース、シェー、バイロン等の詩人が、アルプスをどんな風な眼でみたかが紹介されており、第四部は、近藤氏の独壇場ともいふべき十九世紀のフランスの作家、詩人のアルプス観が書かれているが、こゝではスタンダールやユーゴー、デューマの前にはどうにか知つてゐるが、あとは私には殆んど無縁の人々であつた。第五

部でラスキンその他の山岳美論を紹介しているが、こういうものを余り身を入れて読んでいない私には、大変啓蒙的な部分であつた。

第六部となる私にも大部親しみのある名前が出てくる。山全般ではなく「登山」文学史上の人物と作品——であるからである。唯ギド・レイから急にレビュファに飛んでいるのは少し惜しい気がしないでもない。それにしても、元来、フランスの登山家(主としてガイド)に先天的な不意意識をもっている私に、ガストン・レビュファが人間としてもそんなに優れた個性の持ち主であることを教えてくれたのはよかった。

第七部には所謂「山岳小説」のことが書かれているが、結論としては、「白鯨」や「老人と海」に匹敵するような山の小説は、今のところまだないといふことであるらしい。

読後感には、讀まして貰つてよかったという言葉に尽きる。この中に出てくる一つ一つの人物や作品について、これからは大いに勉強してみようという意欲を燃え立たせてくれただけでも大変有難く思つてゐる。

◆最後にこれだけの本としてはミス・プリントは少ないようだが、気のついたのを二、三挙げて
私たさ(私たさ168)、正解さ(？201)、欣快(欣快？223)、ヒンチクリフ(ク不要231)、遂一(遂一37)。
尚、マッターホルン関係で、ツムットのペンホルはペルが正しく、フルゲン機は土地ではフルッケンと発音されている筈である。

一九六五年・一〇月発行
東京・白水社 三四〇頁
定価 一〇〇〇円

(吉沢)

山岳巡礼倶楽部

「ガムス」

創立三十周年記念号

山巡グルーブは戦前十年、戦後二十年の歴史の中で、山での死者を一人も出さなかったという珍らしい集まりである。

この十月に首記の記念号を出したが、内容はなかなか豊富である。会員の数の変遷が何処にも書いてないので、位の規模なのかよくわからないが、祝辞やら憶い出、座談会の出席者などの顔振れをみると、私にも大部顔馴染みの人が多い。それに岳連をつくったのもこの会の人達だったのかと改めて認識を深めた訳である。又、ヒマラヤへ行った人も四人いるといえ、会員諸君の日頃の研さんと思はれて甚だ心強く感ずる次第だ。

この記念号に祝辞をおくった尾関、海野、杉本の三氏の名前が目次の方で落ちているのはえらいミスである。会社の社報係だったらずは罷免ものであろう。

照さんは「これからのヒマラヤ登山」の中で、ネパールの登山禁止問題を論じているが、情報屋の彼だけに細かく調べている。唯、「印度はネパールに対し宗主権を認め……」とか、「清朝がその宗主権を認めていたため……」とかのこの認めというものが少し気にかかる。

三十周年記念山行としての三〇〇〇m峰二十二座同時登頂という企画は面白い。下又白谷の研究が九頁に亘って書かれているが、これもその道の人には参考になる記事と思われる。

五年間の冬山合宿記録に含まれる「明神岳東稜」他四つの登攀は、それぞれに優れた同会会員の水準を示す好記録であろう。

最後に、立派な歴史と伝統をもつこの十月に首記の記念号を出したが、内容はなかなか豊富である。会員の数の変遷が何処にも書いてないので、位の規模なのかよくわからないが、祝辞やら憶い出、座談会の出席者などの顔振れをみると、私にも大部顔馴染みの人が多い。それに岳連をつくったのもこの会の人達だったのかと改めて認識を深めた訳である。又、ヒマラヤへ行った人も四人いるといえ、会員諸君の日頃の研さんと思はれて甚だ心強く感ずる次第だ。

◇エヴェレスト言始め◇

山崎 安治

山日記の某一九六五年版に小林義正氏が「ヒマラヤ言始め」なる小文を書いておられる。小林さんならはのもの、たいへんおもしろく拝見したが、小生もその驥尾にふしてひとこと仲間入りさせていたきたい。これは「西洋見聞録」にのっているもので、エヴェレストを紹介した邦文としては恐らくもっとも初期のものではないかと思う。

「西洋見聞録」というのは前編三冊、後編四冊、著者はのち日本新聞の発行に尽力した英学者村田文夫で、明治二年から三年（一八六九年一七〇年）にかけて出版され、著者が四年間留学した英国を主としその他の諸外国の政治、法制、風俗、習慣を述べたものである。当時西洋のだいたいの事情を日本人の頭にはつきりと映じさせたものは「西洋事情」に次いで、この書であると尾佐竹博士も記しているが、この後編巻之三の西洋雑記の中に次のようにエヴェレストが紹介されている。

○五州第一ノ高山ハ、印度ト吐番ヲ境界スル所ノヒマレーヤ山（ヒマレーヤトハ雪上ト云ル義ノ番語ナレバ漢人又雪山ト呼ブ）是ナリ。其最高頂ヲマウント・イヘン海ストト云ヒ、直線ノ高サニシテ海面ヨリ高キ事我カ八丁三二間（二万三ヒート）ニシテ、支那ノ崑崙山ヨリ高キ事我ガ三十一丁四間（崑崙山ノ高サ一萬八千六百ヒート）ニシテ

の会が、高橋（定）、高橋（照）、斎藤等のベテラン岳人のよき指導の許に、今後益々円満な且榮光に輝く発展を続けられるよう祈ってこの紹介の筆をおく。（吉沢）

我が五十二丁四間（ニナル）ニシテ、我が富嶽ヨリ高キ事、四十八丁四十五間（富嶽ノ高サ一萬二千四百五十ヒート）ニシテ我が三十四丁三十五間（ニナル）トシ、印度ハ吐番ハ相往来スル所ノ山路ノ高サ我が五十丁（一萬八千ヒート）ニシテ西土ノ国民常ニ往来通商スト雖モ、比年寒氣ノ為ニ斃ル、モノ少カラズ。然レドモ高サ五十丁ノ山上ニ林木森然トシ、三十三丁（一萬二千ヒート）ノ処ニ小麦ヲ生スト云フ。

印度測量局によってピーク十五という符号のつけられていた山が、二萬九千二百ヒートと算出され、それを算出した測量技手が「私は世界の最高峰を発見した」と呼びながらジョージ・エヴェレスト卿のあとを継いだ測量局長官ウォー卿のオフィスに飛びこんだといのが一八五二年のことだから、それから十八年たつて日本にも世界の最高峰エヴェレストが紹介されたのである。

なおこの次の項には世界最高の活火山としてコトバクシーの紹介記事があるの、ついでにつけ加えておきたい。（チンボラソは死火山）

○（前略）又南亜米利加州内ニ在ル所ノカトハチシ山ハ、世界第一ノ噴火山ニシテ平地ヨリ高キ事凡我一里半（一萬八千八百七十五ヒート）火燭ノ噴昇スル事凡我ガ八丁余（三千ヒート）ニシテ、英人ボムホルトハ凡七十里外（百五十マイル）ニ在テ其噴鳴ヲ聞ケリト云フ。



辰 沼 広 吉 氏 画

リュックサック麻痺

長谷部 昭久

最近、山岳部、ワンゲルの「シゴキ」が問題となつてきている。

特に農大のそれは、我々医師として、岳人として許すまじき行為であった。また、本年一月、医学専門雑誌「災害医学」にリュックサック麻痺の症例報告が出ていた。その後五月の連休に都内某女子短期大学ワンダーフォーゲル部で、丹沢に新人歓迎登山をし、新人にリュックの荷物を背負わせ、リュックサック麻痺を来し、我々の病院を訪れた。

初診時は、左上肢が無力状態で下垂し、肩関節が僅かに可動性を保つのみで、肘手、手指各関節の自動運動は不能であった。また、左鎖骨上部、即ち上腕神経叢に著明な圧痛が認められた。頸椎レントゲン写真、血沈など検査結果では特記所見はなかった。

直ちに入院させ腫脹緩解消炎剤、V.B.大量および理学療法を開始した。三日目に、手指の僅かに動くのを認め約三週目は、握力計が把持可能程になったので退院させ、以後通院加療により、漸次回復をみた。

これだけなら専門誌にでも出した方がよいのであるが、その間の同僚の態度、言動が問題なのである。

まず、治療を必要とする麻痺に至るまで、行動をさせた事、次にこの反省もなく、医師に対して、入院、加療の必要がないと暴言すること、再三の説明にも納得が出来ず、自己満足の主張に終始することなどである。

知らないでやったことに、指摘された場合、素直にそれを認め、次と同じ事態を起さない態度、また、リーダーになるものは隊員の心身についての知見を持ち、起り得る弊害など、充分考慮するのが当然の責務である。この上に立つた計画、実動がなされるべきが必然ではなからうか。勿論、用具についても一考を要する。個人の自己を認知することも怠らるべきではない。

昨年夏、御殿場、大学山岳部活動協議会なるものがあつたが、これは遭難対策に終始し遭難予防には殆んど触れられなかった。遭難対策も必要ではあるまいか。臨床医学、とりわけ治療医学ばかりあつても、基礎医学、特に予防医学がなければ、患者は増加するばかりであらう。

この様な観点からの遭難予防の啓蒙を積極的に行えば、前記の如き事故も、リーダーも少なくなるし、大きな遭難も減少するのではなからうか。（終）



いわなだめ・1962

会員通信

冠さんに届ける

吉沢 一郎

十月十四日の六十周年の日に冠さんは見えなかった。記念品と銀巻バッジが私のところに届けられた。住所が同じ北区だからということでお届け願いたいとのこと。

十月の最後の日曜(三十一日)に私は孫の一人を連れて秋雨のそ降る朝のうちに、冠さんのお宅にお邪魔した。予め東京都の区別地図で調べておいたので大体の見当はついていました。

王子から東十条に行き陸橋を渡って交番のお巡りさんにくくと、十四番地ならその石段を降り、あの踏切りのところまで行って聞いたらよいと教えてくれた。

冠さんの家は、高台までは登らない京浜東北線に沿ったあたりにあるらしい。十四番地と思っていたので、番地を標識で確認しながら尋ねたが、十四

番地にはない。お米屋さんに聞いたら、頭にかぶる冠さんなら、あのトランスの載せてある電信柱から四本目の横町を曲った左側三軒目であると教えてくれた。実際は岸町二丁目十七番地であったのである。

小じんまりした余り目立たない家で、松次郎さんの表札は冠郁夫さんの上にかかっていた。

と奥さんが出て来られた。山岳会の吉沢です、という、今度は当の冠さんがうしろから顔を出された。

ふとみると部屋の右手に布団がひいてある。御病氣かな、悪いことをしたと思ったが、まあお上り、ということとで遠慮なく孫と二人であがり込んだ。今まで何か書きものをされていた様子である。

「冠さん、もういくつになられましたか。」
「八十三才です。まあ一応目標の年までは生きましたがね、人間八十才を越すともう、生死のことは超越するようです。吉沢さんはいくつですか。」
「六十二才です。」

「まだまだ働かれますね。七十代までは充分動けますよ。でも私はこの頃すっかり足がダメになりましたね、特に夜はいけません。こないだの晩も特に行きたいとは思いましたが、自重しておきました。この文鎮は重くていいですね。文鎮らしい。話ばかりですが、この頃私はやっと「私の山旅」というのを書き上げました。三百頁位のもので十巻位にまとまるでしょう。あそこにあるのが、その全部の原稿です。」

振り返ってみると、床の間の隅に大きなハトロロン袋が十ばかり重ねてある。思い出したが、冠さんの字は若い。そしてスラスラと読める。所謂うさい老人方の字ではない。

「時にあの表札の冠郁夫さんというのとはあなたなのですか。」
「あれですか、あれは伴でしてね、真面目な男です。共同通信の外信部長をしていました。今は論説に廻っています。入社する時は、当時専務理事だった松方さんの世話になりました。ね。五人探るのに一五〇〇人も来たそう、最後の十五人の中に残った時に、松方さんの口が利いて入ったようです。」

前に戻りますが、この頃は足が利かない上に、脱腸の気味がありましてね、キンの袋の方へおけると、この布団に入って寝ているのです。然し大したことはありません。他に具合の悪いところは全然ないのです。岩永さんが時々見えますよ。奥さんが千葉の方で静養されているそうです。」

私は冠さんに何か書いて貰おうと思っていたが、色紙がなかったので、本が来た時に使われていた、端の少し折れている白いボール紙を持って行った。冠さんは快よく筆を出して下さった。ここに紹介したのはその中の一つである。

余り長居をする事は私も大嫌いなので、直ぐおいとまする事にしたが、話をしている間に孫のやつが、出された羊羹の栗だけ掘きくって食べてしまった。その穴のあいた残骸を二つ、広告の紙に包んで頂いて立上った。

◆東京支部記念山行に参加して

永原 輝雄

昭和二十二年に日本山岳会に入会以来私は二十八年後の今日まで、一度も会の催し事に参加した事のない、怠け者の会員でした。

過日の六十周年記念パーティーには何をしておいても、初めて参加して、会員の皆様にお目に掛り感激を新にしました。これでやっとお仲間入りが、出来たというものです。

これに引続いて、十一月三日の東京支部の記念山行にも、老骨に鞭打って参加させて頂きました。箱根外輪山の明神岳、明星岳は、昭和の四、五年頃よく歩いた山なので、懐しく張切って出掛けた次第です。定刻十時に道了山登り口に着くと、バスから降りた同行数名。その中に曾原、神谷両氏に、私を加えた老童と、村井女史の元気な姿が目につく。

本隊の東京バス組は未着だが、先発する事にして、朝の静寂な最乗寺に参詣。境内を過ぎて、老杉の立並ぶ登山道に入り、軽快な登行が始まる。のんびりしたマイペースで行くと、正午近くにやって、東京組二十数名が追付いて賑やかになった。振返るとはるか小田原の街が霞んで海に続く。この辺から先の私は何べん、本会員や他のハイカーに「どうぞお先に」を繰返して、一本の道を譲った事だらう。という事は、私のペースが如何にのろいかを示すもので、私はとうとうしんがりを承つてしまった。紅葉に色付いた雑木林を出ると、薄の波が秋の陽に白く輝く。これが熊笹に変わると、尾根道が開け、JACの会旗を先頭に、隊列が明神岳を目指して登ってゆく。

頂上では雲間に姿を見せた富士を眺めて、無風の枯葉の上で、記念山行の集りが開かれた。こゝで本日の文化の日に発表になった、日高前会長と、石原憲治氏の鼓動の報告のあと、曾原氏の「大日本帝国じやなかった。日本山岳会万才」の音頭で、一同万才を斉唱して、和かな一時を過ぎた。これらは録音機に収録されたので、今日のいゝ記録となった事だらう。こゝから尾根伝いに、箱根の湯の街を真下に眺めながら、明星岳にまわり、一休の後、一気に宮城野に馳せ下ったのは、午後四時半であった。そこには東京行のバスが、疲れた我々を待っていた。これで楽しい記念山行の行事は終わったが、バスの中では賑やかな談笑が続いた。初めて本会山行に参加して、私は入会以来二十八年間の会とのつながりを、身にしみて感じた。

※新雪・紅葉の旅

荻野 和夫

十月下旬、奥又白池の畔りに二泊幕営、新雪に降りこめられたが、さいわいカゼもひかず、病氣まの自信をとりもどしています。上高地はさすがにツーリストが多く、観光シーズンたけなわですが、山中は人気なく、静寂そのものです。鳥々谷を下りましたが、峠の向うはカラマツの金色の落葉、こちらは広葉樹の落葉しきりでした。

★アンデス遠征隊より★

石原 国利

遠征準備中は何かと心配下り有難うございました。お陰様で元気に航海を続けています。トレーニング、船内講座等日課を決めて過していますので、結構退屈しません。十月二十六日夜にはロスアンゼルスに入港する予定です。会の皆様によりしくお伝え下さいます。

(十月二十五日付、太平洋上にて東海支部アンデス遠征隊一同、松方会長宛)

いう機会を持ちたいと思っている。
尚、この懇談会の運営については次回
の席上で幹事団体を推薦し、日本山岳
会は、世話役として活発な活動を行
いたい。

(当日の出席者・敬称略)

日本興業銀行山岳ハイキング部(三
上正治、町田和子、亘 征子)
東芝山岳会(吉崎一郎)
気象庁山岳部(大井正一)
日本極地研究会(西丸震哉)
三菱商事山岳会(柳川文男)
(文責・関口)

支部臨時役員会

十一月十八日 沼倉、加藤(泰)、松
田、関口、村井田、小味、野萩、富田、
山口、深田、村井米)

(一) 東京支部日印合同婦人登山隊の
件はインドの国内問題で連絡が取れず
来年は遠征がだめとの結論になり遠征
委員会及び事務局は解散する事に決定
した。

(二) 山岳協会の件

過日の都岳連との会合の報告(沼倉)
東京支部としては八月八日日本山岳協
会臨時役員総会に於ての声明にもと
き新しい組織作りに対する事に決意
する。新しい組織作りに対するビジ
ョンのアピールに不足があるので加入団
体及会員に連絡する事を決める。

◇東京支部報知布◇

(小味)

昭和二十四年三十一年にかけて刊行
された東京支部報の左記バックナンバ
ーが若干ありますので、東京支部所属
の会員で御希望の方に無料でお頒ち
致します。御希望の方は送料七十円
(切手)をそえてルームへお申出下さ
い。但し部数に限りがありますので品
切れの節は御容赦下さい。

記

1、2、3、6、7、9、17、19、
42、44、48(庶務担当理事)



・会務報告・

「第二八回 小集会報告」

九月二十八日、本会ルームにおいて
出発前の第七次越冬隊長の武藤晃氏に
「南極観測再開について」、第一次、第
三次隊長であった平山善吉氏に「南極
の山」という題目で話を伺いました。
同時に南極の記録映画「昭和基地の五
年」を上映しました。

武藤氏は、日本隊再開までの経過、
各国隊の行動現況、第七次隊の旅行計
画を説明。平山氏は、登山の対象とし
てみた南極の山を各ブロックごとに説
明、また浅い南極登山史というものに
もふれられたがいずれ南極にも登山時
代が来ることを考えると、平山氏の話
は、機会をみて詳細を本会報にでも発
表してもらいたいと思っています。

(川崎)

日本山岳会

臨時役員総会

日時 十月二十二日(金)午後七時
場所 日本山岳協会事務所

出席者 加藤、高橋両専務理事、辰
沼、大塚、松田、高橋(照)、藤代、鎌田
各常務理事、羽賀、沢村、星野各理事。

△議事

加藤専務理事、議長となり、議題の
協会新規約の一部改正につき検討し次
の様に改正することを決議。

(一) 第六条(加盟)の項に「加盟金
三、〇〇〇円」を挿入。
(二) 規約別表(評議員数及び分担金
の額を規定したもの)を削除する
(三) 付則一の施行日を昭和四十年
十月二十二日とする
(四) 付則三、六を新設し、
付則三、本規約第十四条第四項に
規定する別表によって定められ
る評議員数および第二十一条第
一項に規定する別表によって定
められる分担金の額は第一回の
評議員会において決定する。

付則四、本規約第六条の規定に
かかわらず、評議員会が分担金
の額が決定する迄は分担金を納
入しないで加盟することができ
る。
付則五、第一回評議員会を構成す
る評議員の数は、各都道府県よ
り各一名とする。
付則六、本規約施行の後第一回
評議員会迄は、前規約(昭和三
十九年十月十七日施行)による
役員がその職務を行う。

なお、今後のスケジュールは、十一
月五日頃各県体協宛書類発送、十一月
十五日各県よりの加盟申込締切、二月五
日(火)第一回評議員会とし、これに
間に合う様に名果内の態勢をとめる
様努力することを確認。(松田)

十一月理事・評議員会

(四日・ルーム)

出席者 松方会長、渡辺副会長、理
事 加藤、村木、辰沼、飯野、松田、
川崎、竹田、杉浦、住吉、評議員 吉
沢、村井、青木、東京支部 石原支部
長、沼倉委員、監事 松本、野口(以
下委任)理事 川上、宮下、評議員
川喜田、今西(錦)、今西(寿)、高山、
荒巻、成瀬、神谷、藤本顧問。

△議事

(1) 六十周年記念事業収支報告
十一月一日現在、収入一、四六一

千円に対し支出は一、四二〇千円で
今後の支出予定金額は記念品二三〇
個の売上げがあればカバーできる予
定である。尚この事業に対する寄付
金は六千七百円に達している。

(2) 六十周年記念山行報告
① 山形、宮城支部……(渡辺)
② 東京支部……(村井・沼倉)
③ 関西支部……(吉沢)
④ 其の他支部については担当理事
である大塚理事より夫々の予定、
本部からの派遣者等につき説明が
あった。

(3) 日本山岳協会臨時役員総会報告
(加藤)
十月二十二日に開催し、規約の中
加盟金、分担金の項を修正した。(一
六頁参照)
尚十月十八日は海外登山審議委員
会を開催し、エーデルワイス・クラ
ブ、芝浦工大、千葉大、東北学院大
の四計画を推薦した(一八頁参照)

(4) 年次晩餐会
六十周年の記念パーティーがあつ
たので今年中止という案もあった
が会員各位の強い要望もあって例年
通り開催することにした。十一月三
日(金)三井日比谷ビル八階ホール
会費一、〇〇〇円、本年度も例年通
りの一本展覧を行う。担当 川崎、
深田理事

(5) 経理事務方式変更の件(飯野)
常務理事会で未検討なので、今回
は飯野案として問題点を提示し各位
にこの問題を考えてもらうことにす
る。要点は、
(イ) 誰がみても分かり易い様な処理
方法にすること。
(ロ) 予算に対する会の考え方をき
めることである。即ち
(1) 決算方式を変更する。
(2) 現金収納方式は踏襲するが、
従来とわかれていた差額方式を両
立方式にする。従って上高地山

莊勘定等は会の経理に入ること
になる。
(ロ) 基金の整理……運用財産を債
却していく方式にすべきで、そ
れには財産目録から、基本金以
外のものを収入に取り入れるる作
業が必要。

(2) 予算の立案方法
従来は、年度末に担当理事が、
立案していたが、これからは十二
月から予算の編成にかゝり、一月
の理事会に会長の原案を出し、三
月の理事会に決定したい。原案は
経理、総務、庶務担当の常務理事
で作り項目を集約して考え、然る
上で年度初めの理事会で、予算を各
理事に配分したらよい。

(3) 会費値上げの問題
今年度の収入は五一三万円でこ
の中から六十周年の臨時的なもの
七〇万円と、基金の取組み二〇
万円を考慮すると実質四二〇万円
とみることが出来る。一方支出は
四七〇万円で、本年度は五〇万円
の赤字を生ずることになる。この
対策としては
(イ) 会費を値上げするか
(ロ) 経費を削減していくか
(ハ) 事業を縮小していくか
この三つの方法しかない。従って
新年度の方針も予算に基いて考えて
いくべきと考える。

以上は飯野理事の個人としての意
見であるが、これらの意見をもとに
十二月の理事会迄に常務理事会にお
いて検討し意見をまとめておくこ
とにする。

(6) 各担当理事業務報告
(辰沼)
今年度の厚生省の山岳診療所に対
する補助金二〇万円は会の経理に
一度入れた後各大学に分配する手
続をとったが、来年度は新しい
山岳協会の問題にも関連して考え

ていきたい。

② 国際環境生理学会報告(辰沼)

(会報二四五号十五頁参照)

③ 装備

(竹田)

十一月中旬に休協の日本山岳協会の倉庫に移し、一時保管を依頼する予定である。

④ 庶務

(松田)

会報ファイルは津田評議員のお骨折でオニツカ(株)で一〇〇部作ってもらえることになった。又、今後のバックナンバーを整理し、古いものを会員に頒布したい。

⑤ 会員名簿

(杉浦)

原則として非売品とし、会員外には頒布しない方針とする。然しこの中一〇〇部に限り会員の希望者一部三〇〇円で頒布することを決定。

(7) 其他報告事項

① 訪日韓国登山隊歓迎会

十月二十八日、先に帰国する柳隊長と松方会長他四名で会食、十一月一日ルームで他の隊員の歓迎会を行った。

② 中日映画社より「大岩壁」の推薦の依頼があったが、試写をみた後決めることにする。

③ 全日本山岳連盟創立十周年記念パーティーの件

会より代表が出席する。

海外連絡委員会 (以上)

▽日時 十一月十九日(金) 六時半

▽場所 本会ルーム

▽出席者 吉沢、望月、深田、丹部、大塚、袋、芳野、松田

▽議事

(1) 山岳六一年号に収載する海外登山隊選定の件……一九六五年の海外登山隊の数は、南米九隊、北米九隊、ネパール・ヒマラヤ三隊、ネパール五隊、カラコルム二隊、ヒンズー

シ三隊、アルプス八隊、台湾六隊、ニュージーランド四隊、グリーンランド一隊、アフリカ一隊、韓国二隊、ボルネオ一隊の計五十四隊を数え、「山岳」のスペースから見て全部を掲載することは困難であるので、

A (本文一段組のもの)

B (本文二段組のもの)

C (エキスパディション・ノート)

D (採用しないもの)

の四つに分類した。

A ……6

B ……13

C ……18

D ……9

尚現在実施中のもので、結果をま

つてきめるもの……9

これにもとづき望月編集委員より各

隊のリーダーに原稿を依頼することに

にする。尚エキスパディション・ノ

ット欄は吉沢委員がフォームをと

りて各隊に報告を求め、それをま

とめることにする。

(2) 海外山岳会ジャーナルのバックナ

ンバーの蒐集方法につき検討の件。

現在会に届いていない、デオグラ

フィカル・ジャーナル、ディ・アル

ベンについては、交換図書として寄

贈方依頼し、その他の欠号について

は、各山岳会宛購入したい旨大々連

絡してみることとする。尚 La

Montagne のバックナンバーにつ

ては在バリーの日高名誉会令息に

依頼して山専門の古本屋 Librairie

des Alpes あたりを捜してもら

うことにする。

(3) 明年六月に開催する山岳展のため

の海外資料準備の件……次回までに

案をつくることにする。

(4) その他海外登山情報

来年グレートブリテンのカフカスへ

でかける袋委員からゴリカサスの入

山事情を、その他ネパール、台湾の登

山等につき情報を交換する。(松田)

★ 第四回 海外登山懇談会 ★



〔日時〕 九月四日(月)午後六時三十分

〔場所〕 山岳会ルーム

〔出席者〕 堀川英司郎、倭島進、広谷

精啓、渡辺文明、松田柳子、鈴木文字

吉沢一郎、深田久弥、松田雄一、大塚

博美、ゲスト川上隆、田代儀雄、朝井

一男、芳野利夫、菊子夫妻。

〔テーマ〕 アラスカの山々。

防衛大学山岳部ローガン登山隊々長

の川上さんと隊員の方々、アメリカの

北米北極研究所の招きで氷河の研究に

行った芳野夫妻をゲストに最近のアラ

スカ地区の山々のお話を伺った。

―昨年と較べ変わったことは―

(川上) 「マッキンレー国立公園地

域はオールシーズン、その南端二十五

哩以内もシーズンにより飛行禁止にな

った。理由は、頻る飛行機の飛行

でムース、マウンテンゴート、カリ

ブーなどの動物が他へ逃げ、熊だけが

残るようになったとアラスカ大学の動

物学者がいつていた。

―通関でのトラブルは―

「カナダは通信機を持ち込みを禁止して

いるので、特別に認めてもらうに手

間だった。今後の隊はよく考えて行く

べきだ。その他隊の性格からすべてス

ムーズに行ったが港の水解がおそく船

の入港が半月おくれたので、スケジェ

ールのおくれをとるもどすに大変だ

った。

―天候や登頂の模様など―

「ローガン附近の天候は、六月から七

月中旬頃が登山期と聞いて行ったが、今年八月月中旬まで天気は持ち、大体よかったようだ。

六月二十四日、B・Cを二三〇〇米に建設以来、ラストキャンプC・5を四七〇〇に設け七月二十五日、三名の隊員が午前一時に登頂に向い、一七・三〇・六〇五〇米の頂上に立ち二二・〇〇・五に帰降した。気温零下二十五度で、風速約二五米位でこの中を二時間の実動であったが凍傷一つなかった。風と雪止、五〇〇〇米位から高度の影響に悩まされた。

技術的には尾根下部三〇〇〇四二〇〇米までが悪く、固定ザイルをベタに張った。巨大なリッチの上の雪庇の沈下、雪崩などに大いに気を使ったが日本の雪山の経験からの判断で原則通りに処理した。

―現地食の購入や物価などは―
「米軍基地内で、肉、生野菜などを購入した関係で安く上がったが、物価は米本土に比べ、平均三〜四倍高い様子、現地到着後直ちにワーゲンを一台中購入し、帰りに売って来たが、差額が三百ドルであったので、チャーター料として考えれば安かった。

芳野さんからは専門の研究のことは別にして、ドンジュック山一二四〇〇呎の初登頂の模様を聞いた。七頁に詳報あり。この山は地図上無名峰であったが初登頂の芳野夫妻がドンジュック氷河の名を冠したものである。

帰路は研究後の十日間、一八〇〇哩に亘るカナダ北米の自動車旅行を行った。この旅行の話に興味深く伺った。

特にカナダニューン地区のオジルピイ山脈、アラスカ、チユガチ山脈は今後自動車利用の移動登山隊の目標として面白そうであった。

又爾後アラスカ、カナダに向う登山隊への希望として、この地区は文明国の登山ということをお忘れしないで欲しい。ハイウェイのキャンパスサイトの清潔なこと、共同便所がピカピカに光っていたこと、又日本人のたかり精神は何と云うか、車は必ず隊で借りるようすにすべきであると付言された。

昭和四十一年度 スポーツ外貨割当

海外登山計画の審議過程

標記の件については、会報七・八月号に発表し、当会から七隊、全岳連側から三隊、別表一の通り計十隊の計画が山岳協会に九月一日提出された。

最終審議委員会の結果別表二の通り四隊(二五、二五〇ドル)が承認され十一月五日、日体協にスポーツ外貨割当での申請がなされた。

審議委員会の経過は概略次の通り。
〔第一回〕 九月十日、於協会。
十隊の計画のうち、七隊は、カラコルム、パンプジャブ、ヒンズーシ地区で、たま〜印・パ紛争の発生によって、これらの地区への入国の見通しが極めて困難と思われるので、各隊に再検討してもらおうと一ヶ月の余裕を見て、それ〜差展とし、十月十日に返事をもらうことにした。

〔第二回〕 十月十八日、於協会。
計画の延期を申し出た隊は、一橋大京大、千葉岳連、オカリナ山岳会、東海支部のネパール・ヒマラヤは現在登山禁止中なので審議外とした。

エーデルワイスクラブ、芝浦工大の計画は問題なく全員承認。

九州大学のカラコルムへの実行希望は、現在の紛争地区への登山計画であり、委員会としては、かかる状況下での登山申請は常識的にも考えられず、入国許可も不能であろうとの見解から不

承認とした。又、ヒンズークシ地区への希望の東北学院、千葉大の計画については、この地区への入国許可の可能性も残されているという見通しから一応計画を承認、但し、千葉大の計画書は当日にいたるも到着しておらず、意志が不明な点があるので、東北学院の計画と重複しないという条件つきで、大塚委員が事情を聴取することにした。尚、千葉大の計画については、後日事情をきき、委員会はこれを承認した。

◎窓口からの希望

とに角、ひとり合点で、連絡の悪い計画が大半なのはウンザリさせられた。会報の告示には、係の名前、電話番号まで明らかにされているので、計画書の提出前には一度位は連絡をしてほしいものだ。やるのかやらないのか最後まで分らないのもあった位。窓口は会員、団体の小使であるから、ドンドン利用してもらいたい。

本年の審議は幸いに全隊希望通りの額が承認され、極めてスムーズに運んだが、これは昨年と比べれば、異例といえよう。今後、日体協がこれを全額認めるか否か、更に、各隊が入国許可を取れるかどうか、交渉は未だ残されているが、協会としては一応一くぎりついた訳である。(大塚記)

—I— 日体協スポーツ外貨 昭和四十一年度 海外登山計画一覧表

- (1) エーデルワイスクラブ
・六六・五月上旬～九月下旬
・ペルー・アンデス
・プランカ(カウヤラフー及びブカラランラ)
・七名
・坂倉登喜子
・四九三〇ドル

- (2) 芝浦工大山岳部
・六六・四月～十月
・ペルー・アンデス
・ワイワシニ(シウラ・チコ)
・九名
・加藤幸彦
・六六一七ドル
・一橋大学山岳会
・六六・四月中旬～十月中旬
・カラコルム
・マルビティング他
・八名
・山本健一郎
・一五〇〇ドル
・京都大学
・六六・四月～九月
・カラコルム
・テラム・カンリー他
・八名
・？
・一〇〇〇ドル
(3) 九州大学
・六六・八月～六七・一〇月
・K6他
・七名
・吉井樽雄
・八三二九ドル
(4) 千葉大学ヒマラヤ委員会
・六六・六月～八月
・ヒンズー・クシニ
・スリスタン地域
・六名
・中馬敏隆
・六一四〇ドル
(5) 千葉岳連
・六六・五月～九月
・ヒンズー・クシニ
・ティリツチ・ミール
・七名
・高島一芳
・八一六〇ドル
(6) 東北学院大学
・六六・四月～九月

- ・ヒンズー・クシニ
・コー・イ・パンダカー
・十名
・六八五九ドル
(9) オカリナ山岳会(千葉岳連)
・パンジャブ・ヒマラヤ
・バルパッティ山群
・六名
・武田満子
・五三九六ドル
(10) 東海支部
・六七・ブレ
・ネパール・ヒマラヤ
・マカル
・十二名
・？
・一四〇三〇ドル
- II—
日体協スポーツ外貨
割当申請団体
- (1) エーデルワイスクラブ
・ブカララン(六一四七m)
・四九三〇ドル
(2) 芝浦工大
・シウラ・チコ(六二六五m)
・六六一七ドル
(3) 東北学院大学
・コー・イ・パンダカー(六六六〇m)
・六八五九ドル
(4) 千葉大学
・ミール・サミール(六〇六〇m)
・六八四四ドル
- 計
四隊、二五二五〇ドル

支部会員の
皆様へ★★
支部費を各支部宛にお送り下
さい★

関西支部 四〇〇円



(立山雄山神社の古印)

お知らせ

橋本三八氏の病状悪化

一筆お報らせ申上げます。今春胃の手術後いまだ回復と見受けられた、岳友橋本三八さんが、十月十五日再度病状悪化、只今八幡製鉄病院九病棟八号室の病床におりまして、日々岳友見舞に参じておりますが、一寸お報らせ申上げます。同君の回復を祈り、笑聲に接することを祈念止みがたいものがありますが、今度の衰弱は殊のほかひどく山の連中も眉を曇らせております。

(月原俊二)

追記 本号校正中、同氏が遂に十二月四日午前十時二十五分、他界された由の御通知を受けました。謹んで哀悼の意を表します。

(編集)

編集後記

★本号も又二十頁となつてしまつた。六十周年関係でやむを得ない。その代り近く十二頁ものを二回出すことにしたい。

★十月の下旬に関西支部の集りへ出かけた。前の日にいわれたので坐わる羽符が買えず、豊橋までラッシュ時よりひどい立ちこん坊。何が新幹線だと思つた次第。★大津ではある大先輩に、その年でまだ会報なんか、とおこられた。先輩の忠告も尤もだと思ふ。だが乗がかつた船だ、自他ともに潮時だと思われるときまで頑張る積り。★前号から広告が一つ増えた。この頁も広告で埋められれば遠慮なく二十頁ものが続けられるのだが。皆さん一つ集めて下さい。★松田君には相変らず御苦労かけている。会務報告や協会関係の記事彼なしにはこの会報は出来ませんよ。

★宮下君には発送その他で時間潰しをさせている。中島(寛)君には校正の手伝いをやって貰っているが、その他に会報の索引作成も頼んである。二五〇号にはつきたいと思う。★前号には金坂氏の「なだれの分類」を頂いたが、今号から安川氏の「日本のアルビニズム」——大島さんを中心にして——をしばらく連載する。大正から昭和にかけてのアルビニズムの発展に焦点をあてたもの。表題は私が勝手につけた。

★では会員の皆様、昭和四十一年もまた一層よい年でありますように。

(吉沢一郎)

昭和四十年十二月十日発行

東京都渋谷区神宮前

三ノ三 一 外苑コーポ内

発行所 法人 日本山岳会

編集代表 吉沢一郎

頒価五十円

電話(総機)六五〇一七

直通(機)七六五七

振替口座東京四八二九番

印刷所 株式会社 技報堂

山岳保険に入りましょう!!

- 貯蓄にもなります。
- 万一の場合にはひとの迷惑を軽減します。

御相談は **日本団体生命** へ

新宿支社(専門取扱営業所)
東京都新宿区角筈1の844 新光ビル内
電話(352) 1556・1557

登山における
人体工学追求の
勝利!!

画期的な新製品

シャモニー
キスリング
株式会社 **サクラ**

TEL(861)0933-5 (851)3356-8

